

42511

教科書文庫

4
810
44-1934
20000 47795

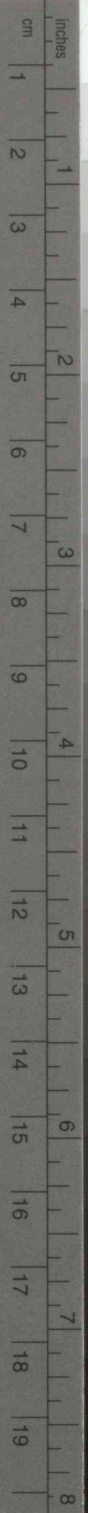
1934

Kodak Gray Scale



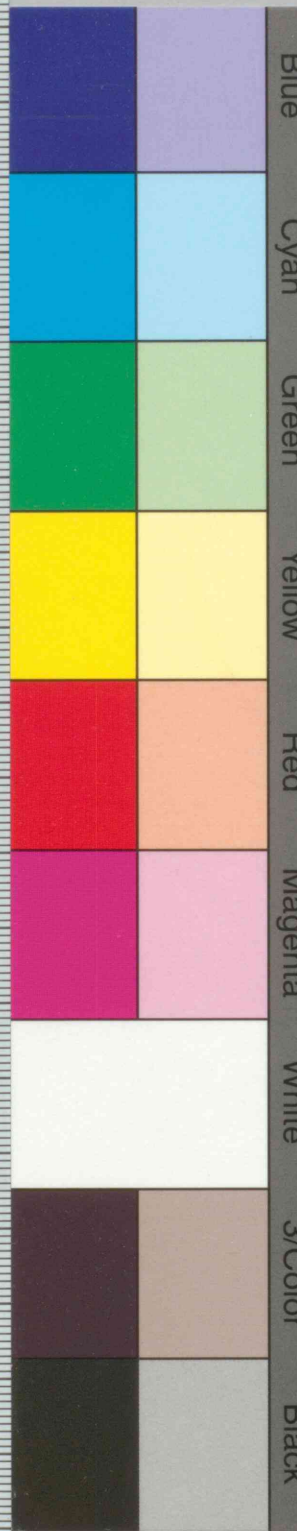
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Fu10
資料室

帝國新國文

甲種實業
三年級

卷二



室 料 資
文 部 省 檢 定 濟
昭 和 九 年 十 二 月 日 實 業 學 校 國 語 科

375.9
Fu10

東京帝國大學
教授文學博士

藤村作編

帝國新國文



本料



甲種實業
三年制用

卷二

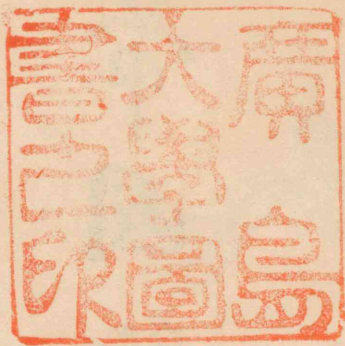
株式會社

帝國書院

二北

七年四月

本料中二学年此組



(第五圖參照)

(小村大聖筆)

那須與一宗高

帝國新國文

甲種實業
三年制用

卷二

目次

- 一 昭和日本の目標
- 二 獨創の國〔日本〕
- 三 花のさだめ
- 四 朝飯
- 五 築山先生に上る書
- 六 西郷と大久保
- 七 西郷南洲
- 八 松島と象潟
- 九 詩人芭蕉

藤岡東圃	松尾芭蕉	藤村作	山本有三	頼山陽	島崎藤村	本居宣長	平福穂八	藤村作
五	四七	四五	三二	二五	一七	一四	八	一

一〇	芳流閣	瀧澤	馬琴	五五
一一	馬琴の心境	芥川	龍之介	六一
一二	夏の夜			七二
一三	ベイトーヴェンの一生	中澤	臨川	七六
一四	小松内府	(平)家	物語	八六
一五	隅田川の雨	加藤	千蔭	九七
一六	天の香具山			一〇〇
一七	閑居雜記	北村	透谷	一〇四
一八	曼珠沙華	近松	秋江	一〇七
一九	日野山の奥	鴨	長明	一一二
二〇	鋏を持つ英雄			一一八
二一	名月			一二七
二二	長柄堤の曙	坪内	逍遙	一二九
二三	恩賜の御衣	(大)	鏡	一三九

二四	青空の鐘	三木	露風	一四五
二五	那須與一宗高	(平)家	物語	一四七
二六	夢應の鯉魚	上田	秋成	一五一
二七	新島守	(増)	鏡	一五九
二八	蜂	佐佐木	茂索	一六五
二九	銀の猫	上田	秋成	一七〇
三〇	歌人西行	藤岡	東圃	一七九
三一	日本精神と世界精神	藤村	作	一八八

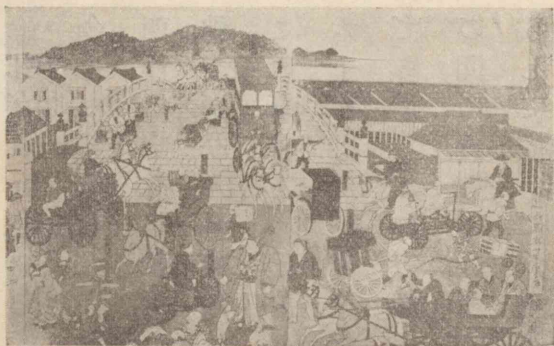


一 昭和日本の目標

藤村作

明治維新後の先輩の先見と努力は今日の新日本を建設した。今日の新日本といふのは、在來の東洋の文化の上に立つた日本に、西洋の文化を輸入し、在來の東洋精神の上に立つた日本に、西洋精神を採り入れて出來たものである。明治大正の六十年間は、全くこの新日本の建設の爲に存したといつてもよからう。實際この六十年間は西洋文化、西洋精神の模倣、輸入、理解、消化に費されたのである。この方針は決して誤つたものではなかつた。而してこの間に於ける先輩の努力は決して少ないものではなかつた。さうして僅かに六十年の間に、西洋諸國が多くの年月を費して成就し得たものを學び取り、輸入し盡くすに至つたのである。物質文化、科學文化の點では、本家の西洋諸國にも、今日では最早多く遜色

模倣



橋本日の年初治明

を見ないまでに進んだのである。それであるから明治大正時代を概観するならば、西洋文化の輸入模倣の時代といつても決して過謬ではないと思ふ。明治天皇の維新の始の五箇條の御誓文にも明かに智識を世界に求むることを仰せになつてゐるやうに、明治大正の國民は皆一齊に西洋文化の輸入、西洋精神の模倣を以てその生活の信条として來た。國民全體がこれを共同の目標として、進行を共にしたればこそ明治大正時代の大成は來たのである。然るにここに御代は變つて昭和となつた。昭和の日本もやはり依然として明治大正の日本で可なりであらうか。昭和の國是は明治大正の國是でよいのであらうか。



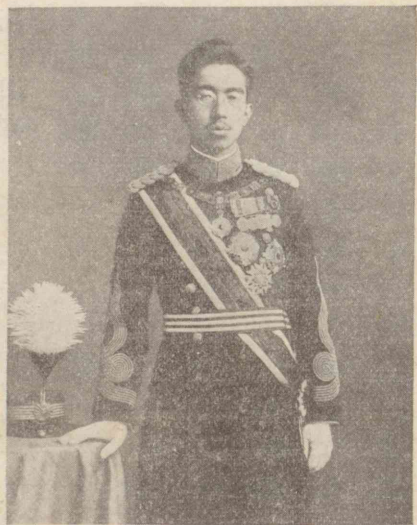
橋本日の代時和昭

私の見る所では、世界に國を成すものは皆他の長所を採ることを一日たりとも怠つてはならない。殊に後れて西洋文化を學び得た我々新日本國民は、將來といへども決して西洋文化の輸入模倣を忽にしてはならないが、併し最早その輸入模倣を以て第一目標とすべき時代は過ぎ去つた。我々昭和の國民はここに新たなる共同の目標を選定すべき立場に在ると思ふ。國民が共同の理想を掲げ、共同の目標に向つて進んでゐる時代は、眞にその國運隆盛の時代である。若し國民がこの共同の理想、目標を失うた時は、國家は最も困難の時代にあることを覺悟せねばならない。

思ふに我が昭和の今日は、最早明治・大正時代の理想・目標を以て満足し得なくなつたのである。西洋の模倣のみでは満足しきれなくなつたのである。故に一國の政治を握るものは、この點に心を致して、ここに共同の理想の光を掲げ、共同の目標をはずきりと認めさせることを先づ以て、今上陛下の御代の初に努めなければならぬと思ふ。これが爲には御大禮は又と得難い好機會であつた。昭代一遇の好機會であつたのである。かういふよい機會を捕へなければ、これを八千萬國民の靈にはつきりと深く彫り附けることは困難である。一遇の好機會を逸し去つたのは残念の事をしたものである。

然らば昭和時代の新國是といふべき、昭和國民の進路に見つむべき共同の目標といふのは何であらう。是を求めることは決して困難の事ではない。又骨折つて探出すべきものならば、それは

容易に國民共同の目標となり得べきものではない。私の見る所では、この目標は決してこれを骨折つて探すまでもなく、極めて平凡なものとして手近い所に在る。否、平凡なればこそ、當然として



今 上 陛 下

國民誰しにも承認され、又手近に在ればこそ、誰が見出したといふこともなく、誰しもが共鳴し得るのである。その目標といふのは、既に今上陛下が朝見式後の勅語の中に仰せられてある「模倣を戒め創造を励める」ことである。そして余はこれこそは、我々昭和國民が、性の如何に拘らず、職務の如何を問はず、悉くこれを體して進むべき目標であり、理想であると思ふ。

即ち政治・經濟・交通・産業・學術・教育その他萬般の生活の上で、最早西洋の模倣ばかりすることを戒めて、日本民族の獨創を以て日本文化を創造することに勗めることを、八千萬國民の共同の目標として、一致して進むことを最も必要とするのである。

併し我々日本人の獨創の文化を創造するといつても、もとより既に世に存するものを基礎として、その上に建設するより外に行くべき途はあるまい。全くないものから造り出すことは到底出来ないことである。既に在る文化の上に新しいものを築くことならば、それは我々の努力に依つて固より成し得べきである。詳しくいへば、世界に存する二大文化は、東洋文化と西洋文化で、その外にはないのであるから、この二大文化の基礎の上に日本文化を建設する外道はないと思ふのである。

さて我々は既に千餘年の歳月を経て東洋文化を消化して來、その粹を集めて所有してゐるものである。そして又同時に最近六十餘年の努力で西洋文化をも理解して世界のあらゆる有色人種の中で、最もよく西洋文化を知る所の國民となつたのである。かくして我々は、世界の二大文化を融合・調和し、統一するに最も有利な立場に在るものである。

翻つて我が國民性を顧み、我々の祖先が支那・印度の文化を輸入・模倣しつゝ、進んで來た跡を見ると、彼等は決して他人の模倣に止り、輸入に満足してゐない。輸入し模倣したものの上に日本人の息をかけて、他國の文化を改造し、これを我の有にしてしまつてゐる。儒教・佛教の如きにしても、日本の儒教、日本の佛教と化してゐる。この歴史的事實に徴して、將來を考ふれば、我々は東西二大文化を融合・調和し、統一して、その上に日本特殊な文化を建設することを成し遂げ得ない國民ではないと思ふ。我々が模倣を戒め創

造を助めて、東西二大文化の融合調和より進んで、日本文化の創造を共同の目標とせよといふのも、決して愚かな強がり、誇大妄想の類ではない。爲政家の探つて以て國是とすべきものであり、國民教育家の教育の理想目標とすべきものであると信ずる。

二 獨創の國「日本」

平 福 百 穂



平福百穂

名は貞藏
秋田縣の人
畫家
昭和九年歿

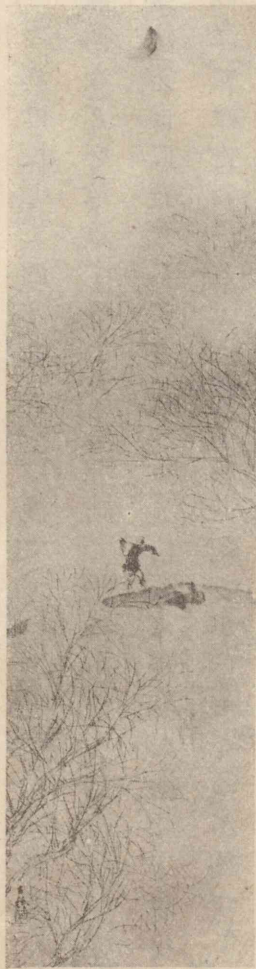
ヨーロッパを一廻りして來て、つくづく日本に生まれたことを仕合せに思つた。それは、非常に豊富に自然に恵まれてゐることだ。無論、歐洲の自然には、日本の自然には無いところの大陸味はある。けれども、四季の移りかほりをはじめ、日本ほど自然から享けてゐるものの豊富な國は、世界に又とあるまい。樹木、草花、果實に至るまで、その種類の多いことは、謂はゞ熱帯から寒帯に至るまでのものが揃つてゐるのだ。山や川や海にしても、島國の常と

して規模の雄大と云ふ點になれば、歐洲大陸に劣るが、濶容あつて麗しく、しつとりと濕ひのあることは、これ又世界に冠たるものである。従つて古來、我が國民は自然に抱擁され、自然に親しみつゝ、生活して來てゐるのであつて、それは我々の風俗や習慣を一目すれば明かである。

これに反して西洋のものは、總てが自然との交渉が薄く、氣韻や餘裕などを尊重するよりも、理詰で納得出来る方を選び、極めて人事的方面に發達して來てゐる。自分の専門の繪の方から見ても、西洋では、古い繪と云へば、十四世紀頃からのものが残つてゐるが、それ等は殆ど皆、宗教や神話に關するもの、つまり宗教畫が先づその全部を占め、風景畫や靜物畫などは、近世になつてやうやく發達したのである。それまでの繪は、總て人事的で、東洋の繪のやうに、古くから景色や花鳥や獸類などの自然を取扱つたものは、殆ど無

いと云つていゝのである。

併し風景畫や靜物畫が發達したと云つても、その取扱ひ方も矢張り西洋流で、東洋に於けるやうに、動物でも鳥でも花でも、自然を樂しむ、つまり鳥や動物等と同化して取扱つてゐると云ふ風なの



春月 (平福百穂筆)

は、無いと斷言出來ないまでも極く稀である。例へば鳥を描くにしても、鐵砲で打殺したのを吊上げて置いたり、デスクの上に他の靜物と一緒に置いたりして取扱つてゐる。花にしてもさうだ。われわれ東洋人は、雨に傾いてゐるとか、露を含んでゐると云ふ風に、詩情を以て取扱つてゐるが、西洋人はたゞ色の材料として取扱

つてゐるに過ぎない。詩と現實と、諸君は果して何れを取られるぞ。

歐洲の往來を歩いてゐる婦人を見ても、或は流行品を飾りたててゐる百貨店などの飾窓を見ても、美を競ひ粹を争つてゐる筈の婦人用の着物が模様にしろ、色彩にしろ餘りに單調で貧弱なことは、意外の感に打たれる。小さな持物や工藝品にしても、非常に單調で變化に乏しいのだ。誰も眼につくやうな極めて複雑な模様のもものも有るには有るが模様として大して價值あるものとは思へない。

然るに、一度日本の地を踏んで、往來の婦人の帯なり着物なりを見ると、その色彩と模様の餘りに多種多様なことは、他の國々とも比較が出來ない。それと云ふのも周圍の自然が樹木の種類、四季に咲く花、山川、海等、往來を歩いても旅行しても、寧ろ餘りに變

化の多きに驚かしめるほど豊富なせるである。總てが詩とか哲學的なものを含んでゐるからである。西洋の山は、日本の山のやうに、森とした——などと云ふ形容詞を使へたものではなく、總てが薄つぺらである。従つて美しい豊饒な自然に育まれて來てゐる日本人の審美眼の卓拔なものも、無理はないと肯かしめるのである。

手工藝品なども、小手先の器用と、この審美眼とのために、精巧なことは、遙かに歐洲諸國をしのいでゐる。紙の美しさ、硝子細工の巧みさ、陶器の高雅さ、その他セルロイドの玩具や、三足一圓ぐらゐの靴下、バナマ帽なども、どしどし西洋へ輸出されて、徒らな西洋崇拜の日本人が、屢々得意になつて外遊土産として逆輸入して來るところである。

日本人は聰明だ、感受性が強い、一見して摸倣性に富むが如くであるけれども、その鋭い頭腦は、如何なる混亂の中にあつても、さらに新しい獨創にまで到達する能力を持つてゐる。われ／＼日本人は、何故に西洋人より劣るものとして、一にも二にも卑下するか。日本を知る西洋人こそ、かへつて日本を恐れてゐるではないか。宗教を見よ、醫學を見よ、化學を見よ、何れも摸倣して以て先進國をしのいでゐるではないか。目下、日本は國を擧げて摸倣し、動搖し混亂してゐるかに見える。しかし、これはやがて、獨創へと踏み出す前提であり、その母胎であるのだ。

藝術に於ても、徒らに西歐諸國に劣るものとして卑屈になるには及ばない。精緻な審美眼と、利鎌よりも鋭き頭腦と、摸倣性が見えてゐる豊かな包容性とは、思想界と同じやうに混亂してゐる藝術界に於ても、明日の日の出と共に新しきものを産み出して行くであらう。

擬文

三 花のさだめ

本居宣長

本居宣長
伊勢國松坂の人
國學者
享和元年歿（年七十二）

花は櫻。櫻は山櫻の葉赤くteriて細きがまだらにまじりて、花しげく咲きたるは、またたぐふべきものなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも品々のありて、細かに見れば、一本毎にいささかかはれるところありて、またく同じきはなきやうなり。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色鮮かならず。松などの青やかに繁りたるこなたに咲けるは、殊に色はえて見ゆ。空清く



花櫻 (筆舟曼村川)

晴れたる日、日影のさす方より見たるは、句こよなくて、同じ花とも

覺えぬまでなむ。朝日は更なり、夕ばえも。

紅梅

梅は紅梅、ひらけさしたる程ぞいとめて、たきを、さかりになるままにやうくしらせ、ゆきて、見どろなくなるこそいと口惜しけれ。櫻の咲ける頃までも散ること知らで、むげににほひなく、ねびれ萎みて残りたるを見れば、げにありて世の中は何事も皆かくこそと、見る春ごとに思ひ知らるか。白きはすべて香こそあれ、見るめは品おくれたり。大かた梅の花は、小さき枝を物にさして近く見たるぞ、こずゑながらよりは、まさされる。桃の花は、あまた咲きつゞきたるを遠く見たるはよし。



(筆一抱井酒)

ありて世の中
のこりなく散る
ぞめでたき櫻花
ありて世の中は
てのうければ
(古今集)

近くてはひなびたり。

山吹・燕子花・撫子・萩・薄女郎花など、とり／＼にめでたし。菊もよき程につくろひたるこそよけれ。餘りうるはしくしたゝかに作りなしたるはなかく／＼に品なく、なつかしからず。躑躅野山に多く咲きたるは目さむる心地す。海棠といふもの、唐めきてこまやかに麗しき花なり。

そも／＼かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人は又思ふ心異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。又今やうの世の人のもてはやすめる花どもも世に多かるを、數へいてぬはことさらめきたるやうなれど、歌にも詠みたらず、古き物にも見えたることなきは、心のなしにや、懐かしからず、覺ゆかし。されど、それはたひとやうなる僻心にやあらむ。

―玉かつま―



島崎藤村
名は春樹
長野縣の人
文學者

四 朝 飯

島 崎 藤 村

復た五月が來た。測候所の技手なぞをして居るものは誰しも同じ思であらうが、殊に自分はこの五月を堪へがたく思ふ。其日其日の勤務―氣壓を調べるとか、風力を計るとか、雲形を觀察するとか、または東京の氣象臺へ宛て、報告を作るとか、そんな仕事に追はれて、忘れ勝ちに月日を送るといふ境涯でも、あの蛙が旅情をそゝるやうに鳴出す頃になると、妙に寂しい思想を起す。旅だ―かう五月は自分に教へるのである。

いろ／＼なことを憶出すのはこの月だ。ある日のことであつた。丁度自分の休暇に當つたので、事務の引續を當番の同僚に頼むつもりで書いて置いた氣壓の表を念の爲に讀んで見た。天氣晴。上昇。雲形層層積卷層。よし。それ

で自分は小高い山の上にある長野の測候所を出た。善光寺から七八町向ふの質屋の壁は白く日をうけた。庭の内も今は草木の盛な時で、柱に倚凭つて眺めると、新緑の香に壓されるやうな心地がする。熱い空気に蒸される林檎の可憐らしい花、その周囲を飛ぶ蜜蜂の楽しい羽音すべて、見るもの聞くものは回想のなかたちであつたのである。その時自分は目を細くして幾度となく若葉の臭を嗅いで、寂しいとも心細いとも名のつけやうのない——まあ病人のやうに弱い気分になつた。半生の間の歡しさを哀しさが胸の中に浮んで來た。あの長い漂泊の苦痛を考へると、よく自分のやうなものがかうして今日まで生きながらへて來たと思はれる位。破船——といふより外に自分の生涯を譬へる言葉は見當らない。それがこの山の上の港へ漂ひ着いて、世離れた測候所の技手をして、雲の形を眺め暮す身にならうなどは、實に思ひもよらない變遷なのである。

かう思ひ耽つて居ると、誰か表の方で呼ぶやうな聲がする。何の氣なしに自分は出て見た。

旅窠れのした書生體の男が自分の前に立つた。片隅へ身を寄せて、上り框のところへ手をつき乍ら、何か低い聲で物を言出した時は、自分は直ちにその男の用事を看て取つた。聞いて見ると、越後の方から出て來たもので、都にある親戚をたよりに尋ねて行くといふ。はるくの長旅、こゝまでは辿り着いたが、途中で病のため、に限りある路銀を費ひ盡くして了つた。道は遠し懷中には一文も無し、足はこの通り脚氣で腫れて歩行も自由には出來かねる。情があらば助力して呉れ。頼む。かう眞實を顔にあらはして嘆願するのであつた。

「實は——まだ朝飯も食べませんやうな次第で。」

とその男は附足して言つた。

この「朝飯も食べません」が自分の心を動かした。顔をあげて拜むやうな目付をしたその男の有様は、と見ると、體軀の割合に頭の大きな下顎の圓く長い、何となく人の好きさうな人物、日に焼けて、茶色になつて、汗の少し流れたその痛々しい顔の上には、確かに落魄といふ烙印が押しあて、あつた。悲しい追憶の情は、その時、自分の胸を突いて湧き上つて來た。自分も矢張りその男と同じやうに、飢と疲労とで慄へたことを思出した。目的もなく彷徨ひ歩いたことを思ひ出した。恥を忘れて人の門に立つた時は、思はず涙が頬をつたつて流れたことを思出した。

「まあ君、そこへ腰掛けたまへ。」

と自分は馴々しい調子で言つた。男は自分の思惑を憚るかして、妙な顔して、たゞもう悄然と震へ乍ら立つて居る。

「何しろそれは御困りでせう」と自分は言葉をつゞけた。「僕の家では君、かういふ規則にして居る。何かしら爲て來ない人には、決して物を上げないといふことにして居る。だつて君、さうぢやないか。僕だつて働かずには生きて居られないぢやないか。その汗を流して手に入れたものを、たゞで他に上げるといふことは出來ない。貰ふ方の人から言つても、たゞ物を貰ふといふ法はなからう。」

かう言ひ乍ら、自分は十錢銀貨一つ取出して、それを男の前に置いて、

「僕の家ばかりぢやない。何處の家へ行つてもさうだらうと思ふんだ。たゞ呉れろと言はれて快く出すものは無い。これから君が東京迄も行かうと言ふのに、そんな方法で旅が出来るものか。だからさ、それを僕が君に忠告してやる。何か爲て働いてそれか

ら頼むといふ氣を起したらば如何かね。」

「はい。」と男は額に手を當てた。

「こんなことを言つたら、妙な人だと君は思ふかも知れないが——と自分は學生生活もしたらしい男の手を眺めて、僕も君等の時代には、随分困つたことがある——そりやもう、辛い目に出遇つたことがある。丁度君が今日の境遇を僕も通り越して來たものさ。さもなければ、君誰がこんな忠告などをするものか。實際君の苦しい有様を見ると、僕は大きいに同情を寄せる。まあ僕は哭きたいやうな氣が起る。眞實に苦しんで見たものでなければ、苦しんでゐる人の心地はわからないからね。そこだ。もし君に僕の言ふことを聞く氣があるなら、一つ働いて通る量見になりたまへ。何か君に出来ることがあるだらう。——まあ、歌を唄ふとか、御經を唱げるとか、または尺八を吹くとかさ。」

「どうもこれと言ふ藝は御座いませんですが、尺八なら少しはひねくつたことも——」と男は寂しさうに笑ひ乍ら答へた。

「む、尺八が吹けるね。それ見給へ、さういふ藝があるなら賣るが可いちやないか、賣るべし。無くてさへ賣らうといふ今の世の中に、有つても隠して持つてゐるなんて、そんな君のやうな人があるものか。ではかうするさ——僕が今、君に尺八を買ふだけの金をあげるから粗末な竹でも何でもいゝ一本手に入れて、それを吹いて、それから旅をする、といふことにしたまへ——兎に角これだけあつたら譲つて呉れるだらう——それ十錢上げる。」

かう言つて、そこに出した銀貨を男の手に握らせた。

「人の一生といふものは、君どうなるか解らない。」と自分は男の顔を熟視り乍ら言つた。「これから將來、君がどんな出世をするかも知れない。僕がまた今日の君のやうに困らないとも限らない。」

十錢上げる
本文は明治四十
年の作で當時こ
の地方では十錢
で尺八を買ひ得
たのであらう

まあ君、左様ぢやないか。もし君が壯大な邸宅でも構へるといふ時代に、僕が困つて行くやうなことがあつたら、その時は君、宜敷頼みますぜ。」

「へ、へ、へ、へ」と男は苦笑ひした。

「いゝかね。僕の言つたことを君は守らんければ不可よ。尺八を買はないうちに食つてしまつては不可よ。」

「はい食べません。決して食べません。」

と男は言葉に力を入れて、堅く／＼誓ふやうに答へた。

やがて男は元氣づいて出て行つた。施與といふことはこんなもので、施された人も幸福ではあらうが、施した當人の方は尙更心嬉しい。自分は饑ゑた人を捉まへて、説法を聞かせたとも氣付かなかつた。「十錢呉れてやつた上に、助言もしてやつたし、まあ、二つ惠んでやつた。」と考へて自分のした事を二倍にして喜んだ。五月

―追憶の五月―寂しい旅情は僅かにかういふことで慰められたのである。

しばらくして、水汲みから歸つて來た下女に聞くと、その男は自分の家を出ると、直ぐに一せんめしの看板をかけた飲食店へ入つたといふ。その時自分は男の言葉を思出して、「まだ朝飯も食べません。」と繰返して笑つた。定めし男の方でも、自分の言葉を思出して、「説法も有難いが、朝飯の方が尙更有難い。」とかなんとか獨語を言ひ乍ら、その日の糧にありついたことであらう。―現代小説全集―

五 築山先生に上る書

頼 山 陽

幸便に任せ一筆申上げ奉り候。残暑の節益々御勇健に御座あそばされ候ことと存じ奉り候。

去臘は色々御世話下され、御別の刻も御親切の條々、肝に銘じ

頼山陽
名は襄
安藝の人
江戸時代の學者
天保三年歿(年
五十三)
築山先生
通稱嘉平
山陽の武道の師

父
 名は惟寛
 號は春水
 安藝の人
 藩の儒官をつと
 めた
 文化十三年歿

忘れ難く候。さてこの度、内々心事申上げ度き儀これあり候。誠に父儀土民より御取立を被り、外諸士よりも御國恩海山に御座候へば、その子たる者粉骨壘身仕り候て御奉公申すべき筈に御座候ところ、只今の身分に相成り致し方これなく、又假令再び御使下され候儀萬一出来仕り候とも、生得多病弱質、少しの事にも耐へ兼ね候故甚だ覺束なく、強ひて相勤め候ては、却つて事を傷り、不忠不孝を増し候やうのこと出来致し候やも測りがたく、且又私一家重疊に官祿を忝う仕り候故、一人は浪人仕る方、天道にもかなひ申すべく候はんか。又奉公仕らずとも、御報恩のいたし方これなしとは申すべからず候。經書講釋等は不得手の儀、得手と申しては史學文學に御座候。これにて少々なりとも御國の御用に相立ち候儀仕り度く、乃ち籠居以來日本外史と申す武家の記録二十二卷著述成就仕り居り候へども、これは區々たるものにて、引用の書ども不

自由、私心に満ち申さず候。愚父壯年のころより、本朝編年の史輯め申し度き志に御座候ひしが、官事繁多にて、十枚ばかり致し置き候まゝにて相止め候。私儀幸ひ閑人に御座候故、父の志を繼ぎこの業を成就仕り、日



頼本にて必要の大典は藝州の書物と人に呼ばせ申したき念願に御座候。この儀三都陽に居り申し候て、書物を廣く取り集め、多聞の友を多く取り申さずては出来仕らぬこと、に御座候。水戸の日本史なども、江戸に

史館御建てあそばされ候はこのわけに御座候。不肖の私に御座候へども、右の場所へ出て、名儒俊才に附合も致し、學業成就、名を天下に揚げ、末代までも、藝州に何某と呼ばれ候は、螢火にて月光を増し候譬にて、すこしは御國の光ともなり申すべきか。

去冬此方へまゐり候件、私好み申さざる事に御座候へども、已に家長より願ひ出で候儀、今更辭退も仕りがたく、急に追ひ立てられ罷り越し候。誠に草原にて馬子・牛飼の外は談話仕り候べき人もこれなく候。廣島に居り候ひし節は、また時節もこれあり候はゞ都會へ出づることとやと、空頼みに存じ候ひしが、今はその頼みも絶え果て候故、日夜悲歎仕り居り候。

然る處福山の公邊にて私を取り放し申さざるやうと、役人共かれこれ談合仕り、私に知行取らせ、士儒に取り立て申したき旨、内意菅先生より申し聞かせられ候。先生には、私所存をば承知これなく承引仕るべき旨、勧められ候。私答へ候に、「これは案外のこと承はり候。私奉公出来候身に候はゞ、本國にて仕り申すべき筈なれば、如何やうの御勸にても、決して従ふべきやう御座なし」と答へ候に、「これは小國故きらひ候か。小國にても俸祿はよろし」と申され

福山の公邊
備後福山藩
藩主阿部氏

菅先生
通稱太中、茶山
と號した
備後の人
著名の漢詩人

加賀
加賀藩
前田氏
薩摩
鹿兒島藩
島津氏

筆蹟
雲耶山耶吳耶越
水天琴弗青一髮
萬里泊舟天草洋
煙横蓬窓日漸沒
瞥目大魚波間跳
太白當船明似月
西遊舊作書爲
山内彈正公子
時己丑九月去
遊時己十二年矣

雲耶山耶吳耶越 水天琴弗青一髮 萬里泊舟天草洋 煙横蓬窓日漸沒 瞥目大魚波間跳 太白當船明似月

山陽筆蹟

天下の人に對し申すべきかと申し切り候。右様の儀は幾重にも相ことわり、この方申分相立て候こともこれあるべく候へども、私多年の願望遂げ候期はこれなきやうに相見え候。何分年少氣銳のうち一度大處へ出で、當世の才俊と呼

叔父
春風・杏坪等

太中
菅茶山

ばれ候者共と勝負を決し申し度く存じ奉り候。家父叔父共は御承知の氣遣ひ手に御座候故、とかく手放し候こと致しかね、爰許にても兄弟同様の太中にあづけ置き、その中に年も寄り候はゞ分別



菅茶山

なほり申すべしと心組み候へども、私は若氣のみにてはこれなく、前段の大志御座候故に御座候。この念願と申すも、人に少しも世話をかけ、物入をさせ候こともこれなく、唯一言の許を受け候はゞ、私一分の才覺を以て一人口喰ひ候ことは如何とも仕り、家元よりの仕送等は一錢も煩はし申さぬつもりに御座候。

家父老年に相成り候て、他處へ罷り越し候儀いかゞに御座候へども、此處に居り候も、京大阪へ參り居り候も、五十歩百歩のちがひ

に候。此處にかれこれと月日を積み候うち、菅先生養育の恩義は日々重り候て、去り難く相成り申すべく、さりとても多年の念願無に仕り候も、残念至極、いかが仕るべきかと案じ煩ひ居り申し候。何卒尊公様の御憐愍にて人一人御救ひ下され、本意を遂げさせ下され候ことは出来申すまじくや。さやうにも相成り候はば、英氣は百倍仕り、多病の身も學問出精、天下の人に一人も追いつかせ申さざる料簡に御座候。かやうの存念、廣島にをり候ひし節より申し上げ度く存じながら、憚多く時節も到來仕らずと存じ黙止仕り居り候へども、尊公様ならてはこの儀御決斷下され候人はこれなく候故、この度憚をも顧みず、生涯の浮沈と覺悟相極め申し上げ候懼れながらよくよく御勘辨下され、何卒尊公様の御心附として仰せ出され下さるべく、もし尊公様御取計にて私生涯の大望御遂げさせ下され候はゞ、この御恩生々世々忘却仕るまじく候。

心事盡し難し、萬々御推察遊ばされ下さるべく候。頓首敬具

六 西郷と大久保

山 本 有 三



山本有と

名は勇造
栃木縣の人
文學者

大久保邸客間

床に

相看兩不厭

只有敬亭山

と大書した幅が掛かつてゐる。

伊藤博文が椅子にかけて待つてゐる。稍待ちくたびれた形で、幅な
どを見てゐる。

家令が這入つて来る。

家令大變お待ちを願ひまして、もう間もなくお歸りになると存
じますか……

伊藤いや。先程から感服してゐるんですが、見事な書ですね。

(幅の近くに寄り)

雪蓬といふのはどういふ人です。



伊藤 博文

家令何でも西郷さんが沖の
永良部島へ島流しにお
なりになつた時、この方
もそこにおいでになつ
たので、お知合ひになつ
たのだとか伺つて居り
ます。たしか西郷さんはこのお方から、いくらか書をお習ひ
になつたのぢや御座いませぬかな。
伊藤ふム。それにこの句がいゝ。「相看^{ふたつちが}て兩ら厭はず。只敬亭山
有り。」實にいゝ句だ。

家令雪蓬といふ方は、この李白の詩が大層お好きで、筆をお執りになると、この句ばかりお書きになるんださうです。——あ、お歸りになりました。

大久保が這入つて来る。

大久保どうも不在にして御無禮しました。何か急用ですか。

伊藤少々御意嚮を伺ひたいことが御座いまして。

大久保さうですか。勝さんと話が長くなつたものだから……

伊藤あ、あの件ですか。如何でした。お引受けになりましたか。

大久保それは引受けて貰つたさ。征韓派の面々が去つた後、すぐに後繼内閣が組織出来ないやうであつては、天下に面皮がないではありませんか。なあに、五參議が揃つて辭職しようとも、何の事もありはしません。

伊藤實はその後任問題について上りましたのですが、西郷さんの

辭表はどう裁きましたものでせう。

大久保それは昨日岩倉公に御返事を差上げてあります。

伊藤辭任を聽き届けよといふのでございませう。併し外の方と違つて、西郷さんでございますからな。岩倉公も一方ならぬ御心配で、是非ともお差留めに相成りたいと仰せになつてをりますのですが……

大久保いや、引留める要はありません。止めたいといふものは止めさせる方が却てよろしい。その方が當人のためです。

伊藤けれども、それは如何にも忍びないことですから……
大久保いや、無駄な手数は省くことです。第一、引留めようとして留るやうな西郷ではありません。現に黒田が行つてさへ徒勞だつたのではありませんか。

伊藤それはさうですが……

大久保陸軍大將だけは従前の通りといふことにして、参議並びに近衛都督はお役御免になされるのが、この際至極の御處置と思ひます。

伊藤なほ躊躇しながら、それでよろしうございますか。

大久保(きつぱり) よろしいで

すとも。



大久保久利通

伊藤西郷さんの辭表が出た

時、僕はあなたこそ第一

にお引留めになる御方

と思つて居りました。

御意見の相違は相違。これはこれで、また別ですからな。

大久保いや、この際は引留めないのが本當です。彼を引留めない者

こそ、彼を最もよく知つてゐるものといふべきでせう。

氣まゝにさしておやりなさい。その方が却て西郷もうるさくないでせう。

伊藤さうですか。

大久保わたしはいつかはかういふ日の來ることを臆げながら豫期してゐました。今回の事がなくとも、これは早晚免るゝことの出來ないものです。それが今來たまでです。このことは戊辰の役に於て、鐵砲の音がはたと止んだ瞬間に、わたしは豫感したことです。わたしと西郷とは兩立し難い人間です。例へば冬と夏とのやうなものです。二人は當然離るべき運星なのです。

伊藤併しお二人は今日まで、殆ど一體のやうになつてお働きになつたのではありませんか。

大久保御一新前まではさうでした。世の中が不順であつたからで

す。夏のさ中に、雪が降るやうな時勢であつたから、それが目立たなかつたのです。けれども物事が緒つづについて、時候が追追定まつてくれば、夏は夏、冬は冬、それ／＼その位置に返るのが順當でせう。そして夏は夏らしく、冬は冬らしくあつてこそ、然るべきものだ、わたしは思つてゐます。

伊藤西郷さんも、さう思つておいででせうか。

大久保さ、西郷はどう思つてゐますか。

間。

大久保伊藤君、西郷が今度、どうして、あんなに向むかになつたのか、知つてゐますか。

伊藤向になつたといひますと……

大久保あの男はいつも黙々として、をつて、滅多めったに自分の意見を吐かない男です。わたしが見込を述べると、汝なのいゝやうに。さ

う云つて、決して逆つたことがありません。功は人に譲り、自分自分はうしろに引下つてゐるといふ性質の人間です。それが今度の御評議に限つて、どうしてあんなに突張つたのか。君はそこに氣がつかせませんでしたか。

伊藤自身の御持論を飽くまでも御主張になつたものと私は思つてをりましたが……

大久保それは無論さうです。併し伊藤君、西郷は實は死にたかつたのですよ。朝鮮を自分の死場所にしたかつたのです。

伊藤(無言。大久保の顔を覗くやうに見る。)

大久保あの男は死を急いでをるので、いつか私にこんなことを言つたことがあります。「己おれはもう、一度死んだのだから、天地に家はないのだ。」知つてゐるでせう。彼は月照和尚と海に投じて、自分だけ助かつた、あの事をいふのです。

月照
京都清水寺成就
院の住職
安政五年十一月
隆盛と共に海に
投ず

順聖公
島津齊彬
安政五年歿

三郎公
齊彬の弟
島津久光
明治二十年歿

伊藤存じてゐます。

大久保それからまた、自分を取立て、下すつた順聖公様がおかくなつた時、西郷は追腹を切らうとして果さなかつたことあるのです。それやこれやで、自分は主におくれ、同志におく



西郷隆盛

伊藤なるほど……

大久保ですからどうせ捨てる生命なら、朝鮮に行つて捨てたい。そして自分の屍を橋渡にして、若い軍人どもを働かしてやりたい。手柄を立てさせてやりたい。かう西郷は思つてゐるの

です。わたしは彼のさうした心の中を思ふと、實際死なしてやりたく思ひます。死なしてやるのが、むしろ西郷を生かしてやることのやうに思ひました。併しわたしまでがそんな心に引き入れられるやうであつてはなりません。どんなことをしても、西郷には生きてゐて貰はなくつてはなりません。國家の大局からは申すまでもなく、西郷一身のためから申しても、斷じて彼を死なせることは出来ません。西郷は恐らくわたしを怨んでゐるでせう。併しどんなにどんなに怨まれても、わたしは彼を殺すわけにはいきません。——ところが伊藤君、わたしは嘗て西郷に死を迫つたことがあるのですよ。

伊藤あなたがですか。それはいつものあなたにも似合はない振舞ですな。

大久保わたしも若かつた。それはもう十何年も前の話です。丁度西郷が大島から召還されて、三郎公のお伴をして京へ上る時のことでした。殿にはもと／＼御覚えがよくないところへ、憂國の心からとは申せ、お言付を待たないで、西郷が少し取計つたことをしたために、彼は忽ち召捕られるやうな羽目に立至つたのです。わたしはその時つく／＼世の中が厭になりました。一心同體の西郷がこんなことになつては、もう討幕の望みも何もない。こんな位ならいつそのこと、二人刺し違へて死んでしまつた方が増した。さう決心して、彼を濱邊に誘ひ出したことがあるのです。

伊藤それが今度は思はない事で刺し違へてしまつたわけですね。大久保人生の事思議すべからずです。西郷は月照と死なうとして死ねなかつた。わたしは西郷と死なうとして死ねなかつた。

西郷がいつかわたしにいつたことがあります。「人間は死なうとしても中々死ねるものでなく、生きようとしても案外生きれないものだ。」それを聞いた時には、それ程にも思ひませんでしたが、わたしは今その言葉をしみ／＼思ひ出します。書生が這入つて来る。

書生あの西郷さんがお歸りになつてしまつたさうです。

大久保國へか。

書生はい。たゞ今役所から知らせて参りました。

大久保さうか。——とう／＼歸つてしまつたか。

伊藤すると西郷さんへの辭令は、どうしてもあなたが仰しやつた通りにする外はありませんな。

大久保(うなづく)

伊藤では、私は早速歸つて、岩倉公に復命いたしませう。

伊藤去る。

大久保書生を呼ぶ。

大久保おい、その掛物を掛け變へてくれ。

書生何を掛けませう。

大久保何でもいゝ。南洲のものを掛けてくれ。

書生幅を掛けかへる。それは

「盡人事、俟天命」南洲書

と書した一軸である。

書生これでよろしうございますか。

大久保うむ。

書生去る。

大久保しづかに立つて床の間に香を焚く。

夕暮と共に部屋の中が次第に暗くなる。併し外はまだ明るい。西

日を受けた障子に庭の松影が黒々とうつつてゐる。

大久保じつと黙したまゝでゐる。

幕

—山本有三全集—

睦月 早月 長月 如月 水無月 神無月

七 西郷南洲

藤村作

安政五年の霜月なかば、

月影碎くる薩摩のせとの

波間に沈みし刎頸の友、

一人は死して大義に殉し、

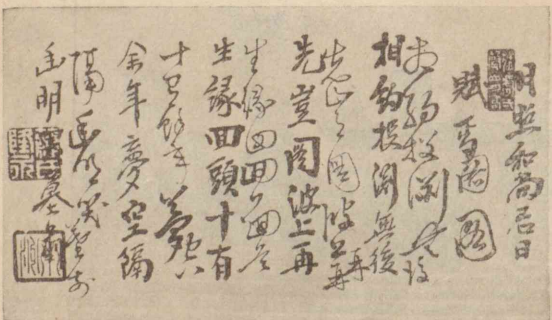
くしくも君はよみがへり、

宏謨を翼けて素志を成しぬ。

哀れは盡きせず、懐往の詩。

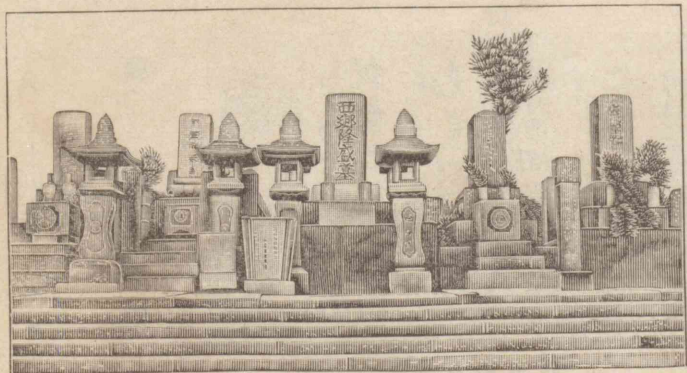
相約投淵無後先 豈圖波上再生縁

回頭十有餘年夢 空隔幽明哭墓前



西郷盛隆筆蹟

自ら危き使に死して、
 國威の張るべき基を立つと
 至誠をこめたる征韓の論
 破れし恨残さぬ心、
 再び世事を口にせず、
 都督の大任辭して去りぬ。
 逸情見るべし村莊の詩。
 我家松籟洗塵縁 滿身清風身欲仙
 誤作京華名利客 此聲不聽已三年



墓の等弟子のそび及盛隆郷西

松尾芭蕉
 伊賀國上野の人
 俳人
 元祿七年歿（年
 五十一）

洞庭
 中華民國湖南省
 北方の大湖

賊の名負ひつゝ世を去りし君
 得喪毀譽のほだしを斷ちし、
 あゝ我が無我の英雄の
 高風誰かは慕はざらん。
 尊ぶべきかな、述懐の詩。
 幾經辛酸志始堅 丈夫玉碎愧輒全
 我家遺法人知否 不爲兒孫買美田

八 松島と象潟

松尾芭蕉

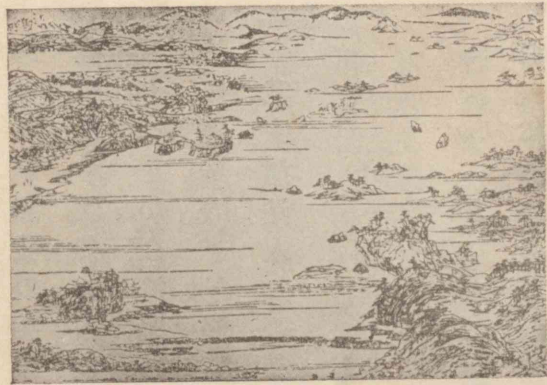
松島

日既に午に近し。舟を借りて松島に渡る。その間二里餘。雄
 島が磯に着く。
 抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西

西湖 中華民國浙江省に在る湖 洞庭と共に有名な勝地
浙江 錢塘江

大山つみ 大山津見神 山を掌る神

雲居禪師 希賢 瑞巖寺中興の僧 萬治二年寂



(傳詞繪翁蕉芭)

松島 あるいは二重にかさなり、三重にたたみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるが如し。その景色、窅然として美人の顔をよそふ。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞をつくさん。

雄島が磯は地つづきて海に出てたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木蔭に世をいとふ人も稀々見え

將リ又

象潟 秋田縣西南部の名勝地 今の象潟驛附近の地

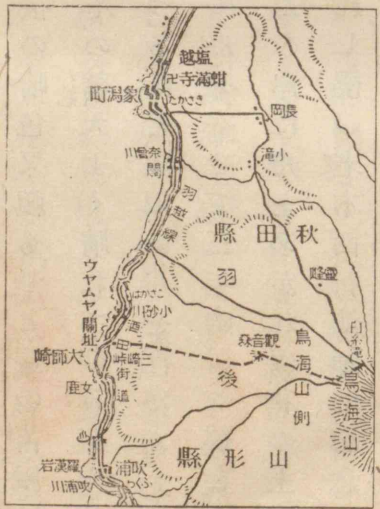
侍りて、落葉松笠など打ちけぶりたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き、二階を作りて、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心ちはせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

象潟

會良

江山水陸の風光、數を盡くして、今象潟に方寸を責む。酒田の港より東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、その際十里、日影や傾く頃、汐風眞砂を吹きあげ、雨朦朧として鳥海の山隠る。闇中に



圖地方地潟象

雨も亦奇なり
水光激瀾、晴偏
好。山色空濛、
雨亦奇。(蘇軾)

花の上漕ぐ
象潟の櫻は波に
うづもれて花の
上漕ぐ海人の釣
り舟。(西行)



五月月の象潟

摸索して、雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蟹の苫屋に
膝を容れて、雨の霽るゝを待つ。その朝天よく晴れて、朝日花やか
にさし出づるほど、象潟に舟を浮かぶ。ま
づ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をと
ぶらひ、向ふの岸に舟をあがれば、花の上漕
ぐとよまれし櫻の老木西行法師の記念を
残す。江上に御陵あり、神功皇后の御陵と
いふ。寺を干満珠寺といふ。この處に行
幸ありし事未だ聞かず、いかなる事にか。
この寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景一
眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、その
影うつりて江にあり、西はうやむやの關路を限り、東に堤を築きて
秋田に通ふ道遙かに海北に構へて、波打ち入るる所を汐越といふ。

江の縦横一里ばかり、佛松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如
く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ます
に似たり。

象潟や雨に西施が合歡の花
汐越や鶴はぎ濡れて海涼し

—奥の細道—

九 詩人芭蕉

藤岡東圃



藤岡東圃

名は作太郎
金澤の人
國文學者
文學博士
明治四十三年歿
(年四十二)

白樂天

字は居易
唐の詩人

寒山子

唐の詩僧

革新の旗を翻して天下の俳風を一變したりしは松尾桃青なり。
桃青又芭蕉と號す。伊賀上野の人。初、その地の城代藤堂氏に仕
へしが、後、主家と世事とを謝して専ら風流三昧に入る。その俳諧
の經歷を尋ねれば、まづ京に出でて北村季吟の門に古風を學び、又
流行を追うて檀林風を弄ぶ。芭蕉もとより學才あり。詩にあり
ては白樂天の平易寒山子の禪機を喜び、別けて李杜の風格を慕ふ。

李 李白
字は太白
唐の詩人

杜 杜甫
字は少陵
唐の詩人

西行 俗名佐藤義清
建久元年寂

桃青の稱も李白と相對せしめんが爲なりと傳ふ。わが國にては最も西行に私淑して、その山家集によりてこそ正風の眼は開けたれ。旅行の癖も亦この自然詩人に負ふところあり。後年江戸に



(筆風杉山杉)

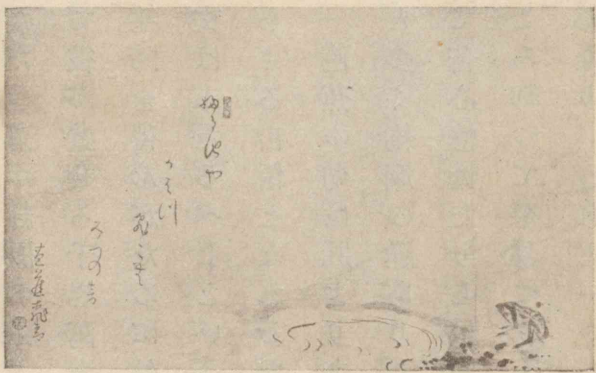
松尾芭蕉の定住して後も、屢道祖神にそそのかされて天外放浪の客となる。

げにも抖擻行脚は芭蕉が生が行樂、諸國の名所舊跡にして彼の詩囊に入らざるもの幾何かある。かゝる經驗を以て從來踏襲の俳句に臨めば、造化の隱微を究め自然の祕鑰を開くべき詩の本義いづこにありとも知らず。この玩具の如き文學の形式によりて胸裡に鬱勃たる感情と、目睫に映じ來る森羅萬象とを

寫さんとすれば茫然自失せざらんと欲するも得んや。李杜西行

筆蹟 ふる池やかはづ
飛こむみづの音
芭蕉桃青

筌蹄 筌者所以魚
得魚而忘筌
蹄者所以兔
得兔而忘蹄
(莊子外物篇)



芭蕉筆蹟

の詩歌は、さすがに宇宙の玄理を解して人生の奥底に觸れ、千載の後、讀者をして光風露月の襟度を偲ばしむ。されど國異なれば言語同じからず、星移れば人情もまた變ず。彼等が詩形、美は美なりといへども直ちにわが筆に入らず、即ち之を今に用ひんや。筌蹄は問はず、魚鳥を狙へ。月をだに忘れずば、指自ら指さん。これぞ芭蕉が根本の主張にして、用語は現代を標準とすれども、取材は必ずしも月雪花紅葉とも限らず、見るものにつけ感興の浮ぶがまゝに打出し、先哲の跡を見ずして、その意を見る。さては、ふる池や蛙飛び込

む水の音の一句に至りて、忽然として轉迷解悟の境に入れりといふ。この一句、詩としての價値はさばかりに高しともおもはれず、ただ芭蕉が經歷の上より見て、すなはち無量の妙味あり。今日まで彼が費せる千思萬考、皆たゞこの境に臨んで即ち應ずる一味の筈蹄を得んがために外ならざりけり。中心の感情は本技巧の波文は末たるべしといへる年來の所説は、こゝに至りて動かすべからざる自信となれるなりけり。

芭蕉の句は壯より老に及びて三たび變化す。漢語を用ふること多く、絢爛の趣ありしはその初なり。華實併せ得んことを欲して苦心慘憺たりしはその中なり。切磋琢磨の功を終へて、思ふところ却つて平易に言ふべからざる輕味を有するに至れるはその終なり。されど一たび古池の響に得たる信仰は生涯を通じて變ぜず、よく俳諧をして盛唐の詩、西行の和歌と比較して軒輕すると

ころなきに至らしむ。翁もまた偉なるかな。

—國文學史講話—

一〇 芳流閣

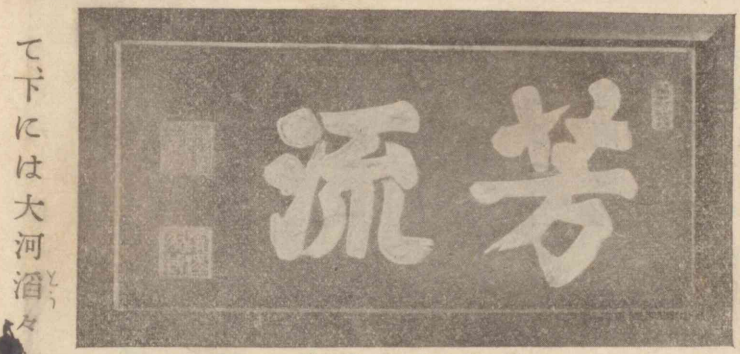
瀧澤馬琴

瀧澤馬琴
名は解
曲亭・馬琴・著作
堂等と號す
江戸時代の小説
家
嘉永元年歿（年
八十二）

滯我
下總國猿島郡古
河町

古の人謂はずや禍福は糾へる繩の如しと。人間萬事往くとし
て塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所はた禍の伏する所、彼
にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知ら
ん。憐れむべし犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身に
傳けつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、遙々滯我へも
たらして、名を揚げ、家を興すべかりし、その福は禍とふりかはりた
る村雨の刃は舊の物ならで、我が身を劈く響とぞなりし、憾をこゝ
に釋くよしもなく、猝急にして、意外にあり。僅かに當座の辱しめ
を避けばやと思ふばかりに、夥の圍を殺開きて、芳流閣の屋の上に、
攀ぢ上れども左右に、脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を究

めたる心の中はいかなりけん想像るだにいと痛まし。



瀧 澤 馬 琴 筆 蹟

されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあら
ずして月來獄舎に繋がれし禍は今恩赦の福
我が縛の索解けて人にぞかゝる捕手の役儀
犬塚信乃を擲めよとて愁に擇み出だされつ。
他の憂を身の面目に今更用ひられんこと願
はしからずと思へども推辭みて許さるべく
もあらぬ君命重し彌高き彼の樓閣は三層な
り。その二層なる檐の上まで身を霞ませて
登りて見れば足下遠く雲近く照る日烈しく
堪へ難き頃は六月二十一日昨日も今日も乾
蒸の燄熱を渡る敷瓦は凸凹隙なく波濤に似
て下には大河滔々たるこゝ生死の海に朝る溯洄は名に負ふ坂東

成氏
古河公方足利成氏
横堀史在村
成氏の老臣

墨氏
墨程
周の人
魯般
公輸般
魯の人

太郎水際の小舟楫を絶えて進退すでに谷りし敵にしあればいか
てわれ繋ぎ留めんと颯の樹傳ふ如くさらくと登りはてたる三
層の屋根には目柴翳す由もなく迭に透を窺ひつゝ疾視へあうて
立つたる形勢浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の窺ふに似たりけり。
廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし床几に尻
を打ち掛けて勝負いかにと見上げたる。又只閣の東西には身甲
したる許多の士卒槍長刀を見かし或は箭を負ひ弓杖突き立て組
んで落ちなば撃ち留めんとて項を反らしてこれを觀る。加之外
面は綿連として杳かなる河水繞りて砌を浸せば借使信乃武事長
け膂力衰へずよく見八に捷ち得るとも墨氏が飛鳶を借らざれば
虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なれば地上に下るべ
くもあらず。渠鳥ならずとも羅に入りぬ獸ならずも狩場に在り。
三寸息絶ゆれば絆みな休まん脱れはてじと見えたりけり。

擬や 凝きまう

膳臣巴提便
欽明天皇の六年
百濟に使した時
虎穴に入つて虎
を刺殺した
富田三郎
和田義盛の臣
源實朝の面前で
大鹿の二本の角
を一度に折つた

その時信乃思ふやう初層二層の屋の上まで追ひ登らんとせし
兵等を砍落しつる後は絶えて近づく者なきに今たゞ獨り登り來
ぬるは世に覺えある力士ならん。這奴はこれ膳臣巴提便が虎を
暴にする勇あるかまた富田三郎が鹿の角を裂く力あるか。遮莫
一個の敵なり引組んで刺迭へ死するに難き事やはある。よき敵
にこそ御座んなれ目に物見せんと血刀を袴の稜もて推拭ひ高瀬
の如き方桴に立つたる儘に寄するを俟てば見八も亦思ふやう彼
の犬塚が武藝勇悍素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めか
ねて他の援を借る事あらば獄舎の中よりこの役義に擇み出ださ
れし甲斐もなし。搦め捕るとも撃たるとも勝負を一時に決せ
んものをと思ひにければちつとも擬議せず御詫さふと呼び掛け
て拿たる十手を閃かし飛ぶが如くに方桴の左の方より進み登り
て組まんとすれども寄せつけず。心得たりと鋭き太刀風に撃つ



芳流閣上の戦 (繪挿本原)

を發石と受け留めて拂へば透かさず數刀尖を枉へて流す一上一
下迂る蔓を踏み駐めて頻りに進む捕手の祕術彼方も劣らぬ手練
の働き岌より落す太刀筋をあちこ
ち外す虚々實々未だ勝負をわかざ
れば廣庭なる主従士卒は手に汗握
らざるもなく瞬きもせず氣を籠め
て見る目もいと過かなり。
さる程に犬塚信乃は侮り難き見
八が武藝に敵を得たりけりと思へ
ば勇氣彌倍して刀尖より火出づる
まで寄せては返す太刀音掛聲兩虎
深山に挑む時錚然として風發り二龍青潭に戰ふ時沛然として雲
起るもかくぞあるべき。春ならば峰の霞か夏ならば夕の虹かと

見るばかりなる、いと高閣の棟にして、死を争ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖、肱當のはづれを、裏かくまでに切り裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて、初めに浅瘻を負ひしより、漸々に疼みを覺ゆれども、足場を揣りて、撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと被けたる聲とともに、眉間を望みて礮と打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刃は鏢際より折れて遙かに飛び失せつ。見八得たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引き着けて、迭に利腕楚と拿り、振ぢ倒さんと曳聲合はして、揉みつ揉まるゝ力足、此彼ひとしく踏み込らして、河邊の方へ滾々と身を輾ばせし覆車の米苞坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に削り成したる薨の勢ひ、止まるべくもあらざれど、迭に拿つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繫げ

る小舟の中へ、打累りつゝ、挫と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水煙、纜丁と張り断りて、射る矢の如き早河の真中へ吐き出だされつ。爾も追風と虚潮に、誘ふ水なる、洞舟行方も知らずなりにけり。

—南總里見八犬傳—

一一 馬琴の心境

芥川龍之介

弓張月

東京の人
文學者
昭和二年歿（年三十六）



椿説弓張月
源爲朝を主人公とした小説
馬琴傑作の一
南柯夢
三七全傳南柯夢
傳奇小説
馬琴傑作の一

「これは初から書直すより外はない。」
馬琴は心の中であらう叫びながら、思々しさに原稿を向ふへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で「弓張月」を書き「南柯夢」を書き、さうして、今現に「八犬傳」を書きつゝある。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎖臺の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、そ

これらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな思はしい不安を禁ずることが出来ない。

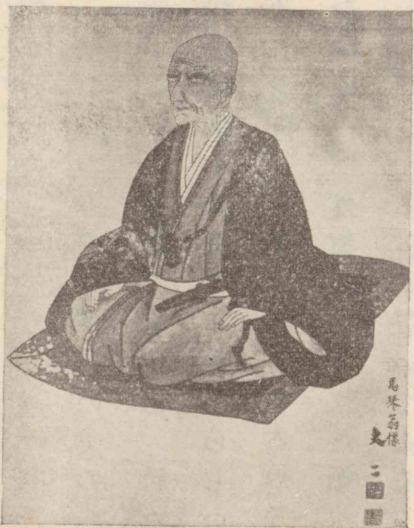
「自分はさつきまで本朝に比倫を絶した大作を書くつもりであった。が、それもやはり事によると人並に己惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は彼の上に何よりも堪へ難い落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。その彼が結局、自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことをどうして易々と認められよう。しかも彼の強大な「我は、さとり」とあきらめ

遼東の豕
遼東有豕、生子白頭、異而獻之、行至河東、見群豕皆白、懷慙還。
(漢書、朱浮傳)

とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひ



瀧澤馬琴

續けた。若しこの時、彼の後の襖がけたましく開けはなされなかつたら、さうして「お祖父様只今」といふ聲とともに柔かい小さな手が彼の頭へ抱きつかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な気分の中に、いつまでも鎖されてゐた事であらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以ていきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

太郎
馬琴の息宗伯の子

「お祖父様、たゞ今。」

「お、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に、「八犬傳」の著者の皺だらけな顔には別人のやうな悦が輝いた。

茶の間の方では甲高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から悴の宗伯も歸り合せたのらしい。太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣に曝された頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を着た太郎は突然かういひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、ゑくぼが

何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう噴き出した。が、笑の中でナぐまた語をつぎながら、

「それから。」

「それから——え、と——痼癢を起しちやいけませんつて。」

「おや、それきりかい。」

「まだあるの。」

「どんな事が。」

「え、と——お祖父様はね。今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから。」
「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」
「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず真面目な聲を出した。

「もつとくよく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事をいつたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。けふ御佛参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて来たのだらう。」

「違ふ。」

断然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰をもたげな

がら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさういつたの。」

浅草の観音
東京市浅草區に
ある金龍山浅草
寺の本尊



里見八犬傳の表紙

かういふとともに、この子供は家内中に聞えさうな聲で、嬉しうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小さな

手を叩きながら、轉げるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に嚴肅な何物か、刹那に閃いたのはこの時である。

彼の唇には幸福の微笑が浮んだ。それと共に彼の目にはいつ

か涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。この時、孫の口からかういふ語を聞いたのが不思議なのである。

「観音様がさういつたのか。勉強しろ、癩癩を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へははいつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

始め筆を下した時、彼の頭の中にはかすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と、筆が進むのに従つて、その光のやうなもの、次第に大きさを増して來る。經驗上、その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ……

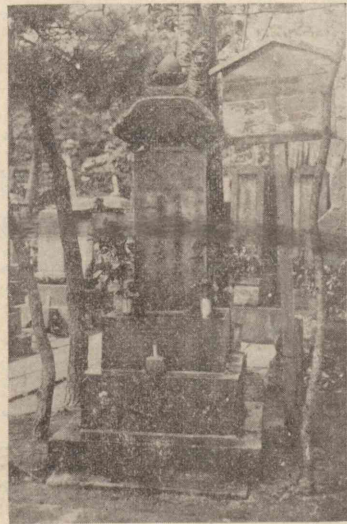
「あせるな。さうして出来るだけ深く考へる。」

馬琴はやゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中にはもうさつきの星を碎いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうして、それが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼には、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生

じて、一氣に紙の上を迂りはじめ。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつゞけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾々として何處からか溢れて来る。その凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が、萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。



馬琴の墓

「根かぎり書きつゞける。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けないかも知れないぞ。」

併し光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。却つて目まぐるしい飛躍のなかに、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として

て彼を襲つて来る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのは、唯不可思議な悦である。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものにと、うして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作の嚴かな魂が理解されよう。こゝにこそ、人生はあらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか……

その間も、茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と嫁のお路とが、向ひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寝かせたのであらう。少し離れた所には、厄弱らしい宗伯が、さつきから丸薬をまるめる

のに忙しい。

「お父様はまだ寝ないかねえ。」

やがてお百は、針へ髪の毛の油をつけながら、不服らしく呟いた。

「きつと又お書きもので夢中になつていらつしやるのでせう。」

お路は眼を針から離さずに返事をした。

「困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ。」

お百はかう云つて、悴と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをし

て答へない。お路も黙つて針を運びつゝけた。蟋蟀はこゝでも、

書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。

—現代小説全集—

一一 夏の夜

清原深養父

元輔の祖
清少納言の曾祖

月の面白かりける夜、あかつきがたによめる 清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを

雲のいづこに月やどるらむ

藤原敏行朝臣

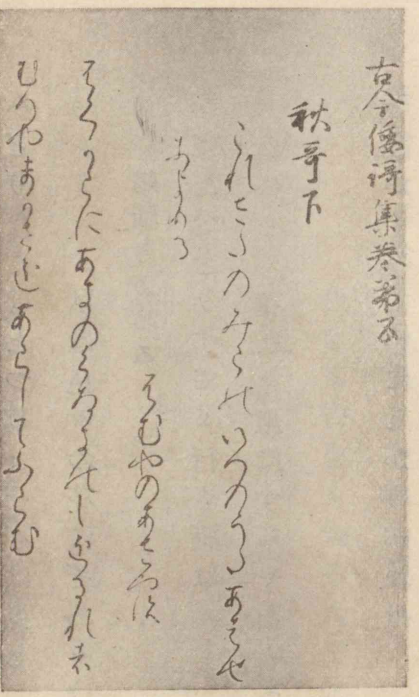
秋立つ日よめる

秋きぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

古今優待集巻第

秋号下



古今和歌集の一第 (傳賢之筆)

大江千里

是貞のみこの家の歌合によめる
月みればちゞに物こそかなしけれ

藤原敏行
清和帝より宇多
帝に歴任した
書道の名人

筆蹟
古今優待集巻第
五

秋号下
これさだのみ
このいへのら
たあはせによ
める ふむや
のあさやす
ふくからにあき
のくさきのしを
るればむべやま
かせをあらして
ふらむ

大江千里
参議大江音人の
子
兵部大掾となる

わが身ひとつの秋にはあらねど
題しらず

讀人しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し

秋は色々の花にぞありける

伊勢

歸雁をよめる

春霞たつをみすて、行く雁は

花なき里にすみやならへる

讀人しらず

春霞かすみていにしかりがねは

今ぞなくなる秋霧の上に

素性法師

みわたせば柳櫻をこきまぜて

都ぞ春の錦なりける

素性
僧正通昭在俗の
時の子

伊勢
伊勢守藤原繼蔭
の女
當代一の女流歌
人

僧正通昭

大納言良岑安世

の男

俗名宗貞

花山の元慶寺の

庵主

花山の僧正とも

稱す

紀友則

古今集の撰者の

一人

撰了前に歿す

僧正通昭

はちすの露をみてよめる

はちす葉のにごりにしまぬ心もて
なにかは露を玉とあざむく

紀友則

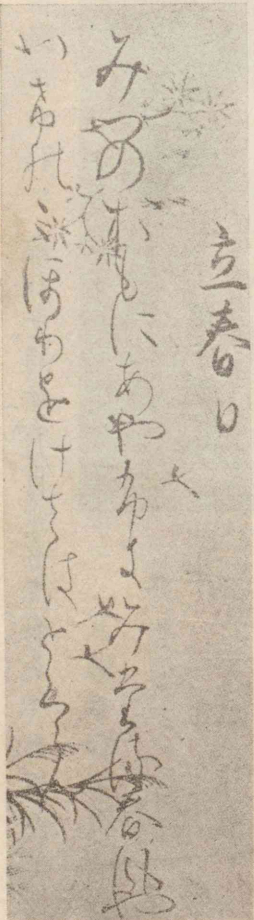
梅の花を折りて人におくりける

君ならで誰にか見せむ梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

立春日

筆蹟
立春日
みづのおもにあ
やふきみだる春
風やいけのこほ
りをけさはとく
らん



蹟筆則友紀

坂上是則

定成の子

大内記、清水寺

別當等となる

大和國にまかれりける時に雪の降りける
を見てよめる

坂上是則

あさほらけ有明の月と見るまでに

春道列樹
延喜十年文章生
となり二十年壹
岐守となる



中沢重雄
名は重雄
臨川は號
長野縣の人
文學者
大正九年歿(年
四十三)

吉野の里にふれるしら雪

年のはてによめる

昨日といひ今日とくらして飛鳥川

流れて早き月日なりけり

春道列樹

—古今和歌集—

一三 ベートーヴェンの一生

中 澤 臨 川

「悲しみを經ての喜び」——これがベートーヴェンの一生の格言であつた。彼の一生は決して野心家を満足させるやうな教訓をも逸話をも有してゐない。それは苦しんでゐるもののために、そして眞に苦しむことの出来る力のあるもののために、聖なる悲しみの甘露を恵むのである。

記憶せよ——特に若い人々のためにいふ。——この世は薔薇の

花の敷かれた街ではない。それは偉大を希ふものにとつては常に孤獨と寂寥に追はれなければならぬ山徑である。最も強いものでさへも、或時は悲哀と失望のために、おのづとその頭を垂れな



ンエヴートーベ

いてはゐられない場合がある。記憶せよ。こんな場合に眞の偉人が汝を助けに来る。ベートーヴェンが汝に役立つ。

凡庸な利害得失の世俗戦に倦れた時、ベートーヴェンの持つてゐるやうな信念と意志の世界に暫くても身を置くことはどれくらゐ我等にとつて強味であるかよ。偉人の身邊には、言葉にいひあらはすことの出来ない勇氣の感染力がある。

我等は運と偶然によつて物質界に成功した著名な人達を忘れよう。たゞ心の偉大であつたものだけがヒーロー英雄の名に値する。人間の偉大さを計る尺度は人格である。我等は成功を説くまい。要は偉大であることであつて偉大に見えることではない。偉人の生涯は長い犠牲に外ならない。悲惨な運命が、彼等の肉と靈の苦しみの鐵砧アイロの上で、彼等の精神を鍛へ上げた。彼等は朝に夕に苦痛と試練のパンを食べた。彼等は何のためにそれだけ苦しんだのであらう。それは、後の世のより強い仲間を助けるためであり、また力と恵みを與へるためであつた。

ベートーヴェンは、一七七〇年ボンに生まれた。彼の祖父も父も、その土地の王室附の賤しい音楽師であつた。彼の母はやはり貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖の爲に、一生を一つの

ボン
ドイツの西部ラ
イン河に沿ふ都
會

楽しみも知らないやうにして送つた。

ベートーヴェンは四歳の時からもう音楽を習はせられた。そして残酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳の時から或劇場のオーケストラに出て、一家の生計を助けねばならなかつた。

彼は十八歳の時眞實たよりにしてゐたその母を失つた。彼はその以前から一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなかつた。彼の父は酒のために全く仕方のないものになりおぼせてゐたので、その受ける養老金さへ、直接子供の手に渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦い經驗は、一生消しがたい深い印象を若い音楽家の胸に與へた。

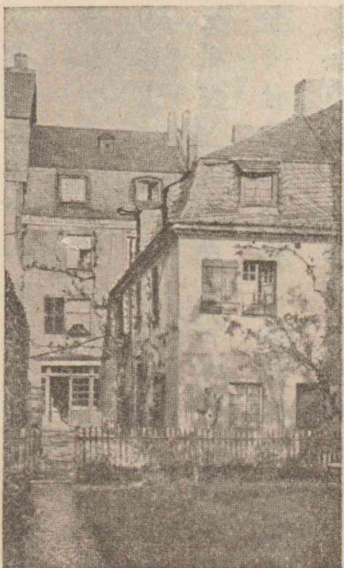
一七九二年彼はウインナへ去つた。傷ましい生活の中にも、流石に若く美しい夢をはぐくんだ靜かなライン川の岸邊を見棄て

ウインナ
オーストリアの
首府

ライン川
アルプス山系に
發し北海に注ぐ
河

ることが、どんなに惜まれたことであらう。「我が故郷！そこは私
が始めて日の光を見たところ、今も昔のやうに美しいところ」とい
つて彼は一生その故郷を慕つた。

その頃から彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年、彼は
自分の手帳にかう書きつけ
た。「勇氣、私の身體の虚弱
なのにもかゝはらず、私の天
才は前途に輝くであらう……
二十五歳！この年齢に今私
は達した……この年齢は人
間がその全部を發揮せねばならぬ時だ。彼はまたかういつた。
「私の藝術は貧しいものを救ふより外の目的に捧げられてはなら
ぬ。」



家生のンエヴートーベ



自畫像

ちやうど、その頃から、また最大の不幸が彼の身體に一生の宿を
取つた。彼は聾ユキになり初めた。世に音楽家はその耳を失ふこと
ほど悲しむべきことがあらうか。彼は堪へることの出来ないほ
どの苦痛を忍んで、幾年かの間それを人に祕してゐた。しかし
よいよ回復の見込の立たなくなつた
時、劇しい絶望を以て、これを友達に打
明けなければならなかつた。「親愛な
る友よ、お前のベートーヴェンほど
不幸なものはない。私の一番貴い部
分である聴感が、今私を見捨てつゝある……私の愛する凡てのも
の、私に親愛なあらゆるものを捨ててまで、このみじめな邪慳ヤカシな世
の中に生き永らへなければならぬ私の一生は、どんなに悲惨で
あらう。私はしばしば、この身を呪つた……私はプルトークから

プルトーク
古代ギリシャの

哲學者・傳記作者
「英雄傳」の著者

忍従の徳を教はつた。出来ることなら、私の運命が私に與へたところに堪へ忍ばうと思ふ。しかし、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物があるだらうかと、つらく考へ悩むことがある。忍従よ。悲しい隠れ場所よ、たつた一つの私の隠れ場所よ。

一八〇六年、彼はフランスウィック女史と婚約をした。しかるに、この平和もまた永く續かなかつた。彼等は互に相愛しながらも、自然に遠ざかつてしまつた。

それからはずつと孤獨の生活が續いた。しかも、それは洗ふやうな赤貧と不遇の生涯であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ」と彼はいつてゐた。或有名な曲を出した時などには、僅か七冊しか賣れなかつた。

愛も野心も去つた後、彼に残されたものはたゞ力だけであつた。その力の喜びと、これを表現する必要とが彼を占領した。一八一

バツカス
ギリシャ神話の
酒の神

ナポレオン
フランス皇帝
(西紀一七六九—一八
三)



ベートーヴェン自筆の樂譜

二年、彼を見た一人は、「どんな皇帝でも、曾て彼のやうに自分の力を意識したものはない」といつた。當時、或者は、彼の曲をさして「醉漢の音樂だ」といつた。確かに醉漢の音樂だ。しかし、彼は自らかういつた。「俺は人類のために喜びの神酒の口を開けてやるバツカスだ。俺は精神の聖狂を人間に與へる醉漢だ。」

彼はナポレオンを見てかういつた。「俺が音樂の術を知つてゐるやうに戰術を知つてゐれば、彼に教へてやるものを」と。彼の容貌はナポレオンによく似てゐた、殊にその意志を現はす引締まつた口元が。この未來の人道を目的としてその一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として靜か

な往生を遂げた。彼は息を引取る前に、自分の一生を顧みてかういつた。「喜劇の終」。その日は殊に嵐が劇しかった、二月の寒い空にはふぶきがして。

「悲しみを経ての喜び、彼ぐらゐ聖い喜びに憧れたものはなかつた。彼は悲惨な生活のどん底から、未來の人類のために「喜悅」の福音を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗した後で、とうとう晩年にその希望を實現した。「第九旋律曲」といふのがそれである。

その曲の中途に、オーケストラが急に停まつたかと思ふと、深い神秘的沈黙がやゝ暫く續く。そして「喜悅」の神が優しい靜かな歩みを以て人の心の悲しみを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがて狂熱の形に變る。そして嵐の中のリヤ王のやうな暴狂に移つた後で、それがまた靜かな、宗教的法悅の境に入り、

リヤ王
シエークスビ
ヤ作の戯曲中の
人物

最後は聖愛の無我郷で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並ぶことが出来るか。オーステルリッツの戦勝も、この永世の凱歌の前には、はかない一場の夢ではないか。偉大な生の熱愛者。彼の口からは常に喜悅の聲が洩れた——不幸が彼の命を奪はうとしたその日でさへ、「おゝ、かうも美しい人生よ」と。また、私は私の生涯を千たびでも繰返したいと思ふ」と。

苦しむものよ、苦しむ力のあるものよ。汝のためには、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟はない。彼は自分が悲惨の頂點にゐる時でさへ、彼の實例が後世の苦しむもののために助となることを望んだ。そして、かういつた。「憐むべき忍苦者は——己と同じやうな一人の人間——あらゆる自然の障害にもかゝはらず、男らしい男になるために、その全力を盡した一人の人間を、こゝに見出して慰安を感ずるであらう」と。

—嵐の前—

オーステルリッ
ツ
當時のオースト
リヤ、ハンガリ
ヤにあり
ナポレオンが露
埃聯合軍を破つ
た地

一四 小松内府

(平家物語)

太政の入道
平清盛

太政の入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黒絲絨の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。貞能と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に、緋絨の鎧着て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、このこといかゞ思ふぞ。保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一宮の御事は故刑部卿の殿の養君にてましまし、かば旁、見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて

先をかけたたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道随分身を捨て、兇徒を追落し、經宗、惟方をめし縛め



平 清 盛

しに至るまで、君の御爲に、すでに命を失はんとすること、たびたびに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不当人が申すことに、君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからぬ。この後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵とな

つて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面のものどもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。とこそ宣ひけれ。

主馬の判官盛國急ぎ小松殿へ馳参つて、世は早かう候。と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼、はや成親の卿の首の刎ねられたんな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長を召され候ふ上は、侍どもも皆うち立つて、ただ今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせうとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせんとこそ議せられ

候ひつれ。と申しければ、大臣、何によつてたゞ今さることのおはすべきとは思はれけれども、けさの禪門の氣色、さるもの狂ほしきこともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。



門前にて車より下り、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各いろくの直垂に盛思ひ思ひの鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外諸國の受領衛府諸司などは縁にゐるこぼれ、庭にもひしと並

みるたり。旗竿などを引きそばめ、引きそばめ、馬の腹帯を固め、胄の緒を締め、ただ今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿烏帽子直垂に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、殊の外に

五戒
 佛教て不殺生・
 不偷盜・不邪淫・
 不妄語・不飲酒
 の五つの戒を云
 ふ
 五常
 儒教ていふ仁・
 義・禮・智・信

ぞ見えられける。
 入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするさまにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながら、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向はんこと、さすが面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹巻の上素絹の衣をあわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛の卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

稍あつて入道宣ひけるは、あの成親の卿が謀叛はことの數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらくとぞ泣かれける。入道さていかにやいかに。とあきれ給へば、稍あつて大臣涙をおさへて、この仰せ承り候は、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。また御有様を見参らせ候に、更に現とも覺え候はず。さすが我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根尊の御末朝の政を掌らせ給ひしより、この方太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふこと、禮儀を背くにあらざや。就中出家の御身なり。法衣を脱捨てて、忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しまさんこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんぞ。かたがた恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。
 まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これな

普天の下、英、
 非王土(詩經)
 瀬川の水
 支那堯の代の隠
 士許由の故事
 首陽山に
 伯夷、叔齊の故
 事

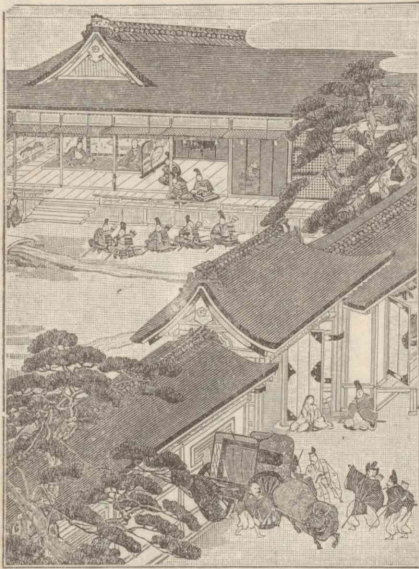
り。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらざといふことなし。さればかの瀬川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかに況や、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府槐門の位に至る。加之國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け參らせ給はんこと、天照大神正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、事すでに露はれ候ひぬ。その上仰せあはせらるゝ成親の卿を

召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて君の御爲には愈、奉公の忠勤をつくし、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明、佛陀感應あらば、君も思し召し直すことなどか候はざるべき。

これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に參り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、
 迷廬六萬の嶺よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛まし

千顆萬顆の玉
 和漢朗詠集の菅
 三品の「瑩日
 瑩」風高低千顆
 萬顆之玉、染枝
 染浪、表裏一入
 再入之紅」の句
 よりとる

きかな。不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷まされり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、ただ重盛が首を召され候へ。その故は、院



(筆翠文原禰)

重盛諫言

參の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し參らすべからず。

富貴といひ榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。

富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候べき。ただ末代に生を享けて、かゝる憂目に逢ひ候重盛が果

報のほどこそ拙う候へ。ただ今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易いほどの御事にこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめざめと泣き給へば、その座に並み給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

入道頼みきつたる内府のかやうに宣へば、世にも力なげにて、いややそれまでのことは思ひも寄り候はず。悪黨どもの申すことに君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなどもや出て來んずらんと思ふばかりでこそ候へ。大臣たとひいかなるひがごと出て來候へばとて、君をば何とかし參らせ給ふべき。とて、つい立つて中門に出て、侍どもに宣ひけるは、ただ今これにて申しつることどもをば、汝等はよく承らずや。けさよりこれに候ひて、かやうのことどもを申ししづめんとは存じつれども、餘りにひたさわぎに見え

つる間、まづ歸りつるなり。院參の御供に於ては、重盛が頭の劔ねられたらんを見て仕れ。されば人參れ」とて、小松殿へぞ歸られける。

その後、大臣、主馬の判官盛國を召して、重盛こそけさより別して天下の大事を聞き出したんなれ。われをわれと思はんずるものどもは、物の具して急ぎ參れと催せ」と宣へば、馳せまはつて披露す。おぼろげにては騒ぎ給はぬ人の、かやうの披露のあるは、まことに別の仔細のあるにこそとて、われもわれもと馳せ參る。都の内外にあふれるたる兵ども、あるは鎧着て未だ冑を着ぬもあり。あるは矢負うて未だ弓を持たぬもあり。片鎧ふむやふまずにて、騒いで馳せ參る。

小松殿に騒ぐことありと聞えしかば、西八條に數千騎ありける兵ども、入道にはかうとも申しも入れず、さやめきつれて、みな小松

殿へぞ馳せたりける。弓箭にたづさはるほどのものは一人も残らず。筑後守貞能がただ一人候ひけるを、御前へ召して、内府は何と思ひて、これ等をば皆、かやうに呼び取るやらん。けさこれにていひつるやうに、淨海が許へ討手などもや向けんずらん」と宣へば、貞能涙をはらくと流して、人も人にこそよらせ給ひ候へ。いかでかただ今さる御事候べき。けさこれにて申させ給ひつる御事どもをば、はや皆御後悔ぞ候らん」と申しければ、入道、内府に中たがうては悪しかりなんとや思はれけん、法皇迎へ參らせんと思はれる心も和ぎ、急ぎ腹巻ぬぎ置き、素絹の衣に袈裟うちかけて、いと心にも起らぬ念誦してこそおはしけれ。

一五 隅田川の雨

加藤 千 蔭

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしく、例の隅田川のほ

加藤千蔭
芳宜園と號す
江戸の國學者
文化五年歿(年
七十四)

△キヤヤワサ
三ツウマン
十カ
九七
シモ
シワス

石濱
今の東京市淺草
區眞土山・今戸
橋一帶の地
隅田川の右岸



川田隅の雨

(筆重廣)

とり石濱の庵に行きてやどりぬ。有明の月のにほひも、霧立ちわ
たる曉のさまも、處がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日
なむ殊にあはれは深かりける。もとよ
り萱ふける庵なれば、音だになくて、軒の
雫三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下
葉の色づきたるがほろ／＼と散るもあ
はれなり。水の面は動くこともなくて
鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつろ
ひて、かつ浮びかつ消ゆる水泡にこそ雨
のけはひはしるかりけれ。みをの一筋
は、さしひく潮にもまじらで、とはにはなだの色に流れいにて、沖に
出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ。
うち向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、ははその黄

筏師の
隅田川蓑着て下
す筏師にかすむ
あしたの雨をこ
そ知れ (千藤)



加藤千藤

ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひま／＼より長き堤の
見えわたるに、堤のをちなる梢はやうやうに淡墨もてかきけちた
らむごとく、いとしもはるけきは、ただなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。
こゝかしこより鳥の飛びゆきつゝ、ねぐらの鷺のつばさおもげに
おき出でて、川の瀬の眞菰におり
立てば、みさごの群れきて水の面
に浮べるもをかし。上つ瀬より
筏師の蓑笠きて棹を筏の上に横
たへ、おのれたむだきて思ふ事な
げにてをり。筏は水のまにまに
流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけてわたり
行く人のやがて堤をあるくさまも、繪によく似たり。すべてひと
日のうちに筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來

みくまりの神
水分の神
水神の森をいふ
隅田川の左岸

て、岸の木立も、長き堤も、あるはあらはれ、あるはかくれて、限なき青
海原にむかひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてや、
夕暮近くなりゆけば、むら鳥のおのがじし時もとむるに、雁の一つ
ら二つらわたり行くなど、いはむかたなし。暮れはてても、猶行く
水の色のみ遠く残りて、川添小田にいはへるみくまりの神のみあ
かしの、海人のいさりびともいふべく、かすかに見えわたるもあは
れなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川

たが墨がきのすさびなるらむ

—うけらが花—

一六 天の香具山

太上天皇
後鳥羽院

春のはじめのうた

太上天皇

ほのくくと春こそ空にきにけらし

天の香具山霞たなびく

攝政太政大臣家百首歌合に春の曙と

藤原家隆朝臣

いふ心をよみ侍りける

霞立つ末の松山ほのくと

浪にはなる、横雲の空

後徳大寺左大臣

晚霞といふことをよめる

なごの海のかすみの間よりながむれば

入目をあらふおきつしらなみ

皇太后宮大夫俊成

百首歌奉りし時

駒とめてなほ水かはん山吹の

はなのつゆそふ井出の玉川

皇太后宮大夫俊成
藤原俊忠の子
後白河帝の時千
載集を撰す
五條三位と稱せ
らる

藤原家隆
後鳥羽帝頃の人
新古今集の撰者
壬生二位と稱せ
らる

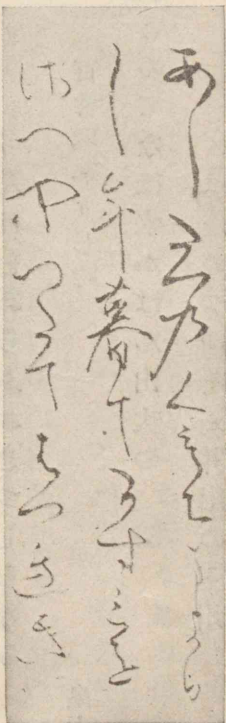
後徳大寺左大臣
藤原公能の子實
定
高倉帝頃の人

筆蹟
あしたへのくも
ぢまよひし年暮
てかすみをさへ
やへだてはつべ
き

攝政太政大臣
藤原兼實の子良
經
後鳥羽帝頃の人

從三位賴政
源仲政の子
高倉帝の頃の人

式子内親王
後白河帝の皇女



良成筆蹟

五首の歌人々によませ侍り
ける時 夏の歌

うちしめりあやめぞかをる時鳥

なくや五月の雨の夕ぐれ

夏月をよめる

庭のおもはまだ乾かぬに夕立の

空さりげなく澄める月かな

百首歌の中に

ながむれば衣手すゞし久方の

天の河原の秋の夕ぐれ

攝政太政大臣

從三位賴政

式子内親王

藤原定家

藤原俊成の子
新古今集の撰者
京極黄門と稱せ
らる

筆蹟

詠下品上生和歌
民部卿藤原定家
たちかへるゆめ
のたうちをし
へをくうてなの
はなのすゑのう
はつゆ

藤原雅經

藤原賴經の子
新古今集の撰者

藤原清輔

藤原顯輔の子
二條帝の時續詞
華集を撰す

詠下品上生和歌

民部卿藤原定家

きりかへるゆめ
のたうちをし
へをくうてなの
はなのすゑのう
はつゆ

定家筆蹟

西行法師すゝめて百首歌

よませ侍りけるに

見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやの秋の夕ぐれ

擣衣の心を

藤原雅經

故里さむく衣うつなり

湖邊月といふことを

藤原家隆朝臣

鴉カラスの海や月の光のうつろへば

なみの花にも秋は見えけり

題しらす

藤原清輔朝臣

冬がれの森のくちばの霜のうへに

おちたる月の影の寒けさ

慈圓
藤原忠通の子
後堀河帝頃の人
慈鎮和尚と諡せ
らる



名は門太郎
神奈川縣の人
文學者
明治二十七年歿
(年二十七)

人間の心中に大文章あり。筆を把り机に對する時に於てより
も、黙居冥坐する時に於て、燦爛たる光明を發する事多し。心中の
文章によりて心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の
文章を装はんとするは、文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、
往々にして文章を事とするを喜ばず。文字の賊とならんよりも
心中の文章に甘んじたればならむ。

身心よくを放ちて冥然として天道に任せんか、身心を收めて凝然と

一七 閑居雜記

北村 透谷

題しらず

前大僧正慈圓

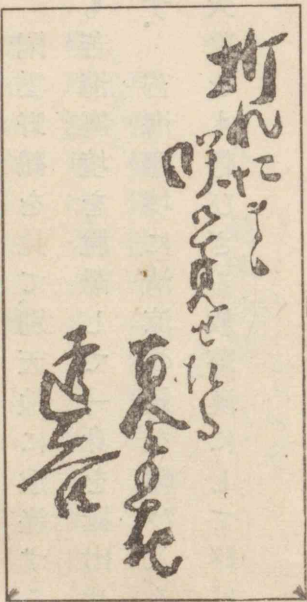
庭の雪にわがあとつけて出でてつるを

とはれにけりと人やみるらん

筆蹟

折れたまゝ咲い
て見せたる百合
の花 透谷

バイロン
英國の詩人
(西紀一七六二—一八
三〇)



透谷筆蹟

ち現身の我に還る。自然
は我を弄するに似て弄せ
ざるを感得すれば、虚も無
く實もなし。

世にありがたき至實は涙なるべし。涙なくては情もなからむ。
涙なくては誠もなからむ。狂ひに狂ひしバイロンに對しては細
繩程の役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繋
ぎ止むるはこの實なるべし。遠く行く人の足を踏み止まらずも
の、猛き勇士の心を弱くするもの、情違ひ歡薄らぎたる間柄を緊め

固むるもの、涙の外には求めがたし。人の世に涙あるは原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、甚だしく悲しきことは跡を絶つに庶幾からんか。

閑雲野鶴を見て、別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脱離して一身を挺出せんとするは、人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸び入るゝにあらざれば、詩人は一の天職をも帯びざる放蕩漢にして終はらんのみ。

大なる悔改はまた一個の大信仰なり。「罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし」とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて、明日の是を期するは信仰に入るの要諦にして、罪人の

カーライル
英國の文豪
（西紀一七九七—一八



近松秋江

本名は徳田浩司
秋江は號
岡山縣の人
文學者

必ずしも自殺せざるは是を以てなり。罪の重荷は忘れざるによりて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

—透谷全集—

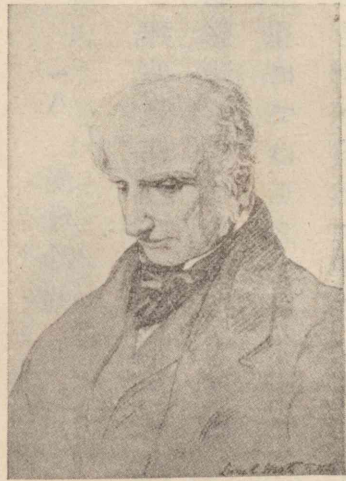
一八 曼珠沙華

近松 秋江

拜啓、曼珠沙華の油畫、たしかに受領致候間、御安心被下度候。曼珠沙華は、吾々の生國邊にては、死人花と申し、あまり心持のよき花にては無之候へども、この花を見る時は、種々幼き折の懐かしき聯想、自然に浮かび出で申候ゆゑ、かうして多年生國を離れて、他郷に流寓しをる吾等に取りては、忘れ得ぬものの一つにて候。幼き頭腦に深く印象をのこしたる故郷の山河の形態種々の自然の色彩、さして勝れたるものとは思はねども、その色々の形の年と共に記憶に新になり行くやうに被存候。英國の湖畔

ウオーヅウオース
英吉利の近代詩
人
(西紀1700—
1800)

詩人ウオーヅウオースが、幼時を追憶して、靈魂の不滅を歌へる長詩の心は、この詩を始めて読みし時には、味解するを得ざりしが、十年を経二十年を経たる今日、時々想ひ浮かべ候へば、清純なる我が心の奥に、獨り靜かに省みて、漸く會得出來候やうに存候。



スーオウヅーオウ

今にして思へば、幼時の心は、恰もこの曼珠沙華の咲き溢れたる初秋の野邊の照り輝く日の光の如く麗かにして、かつ清純なりきと申候べきか。盛夏の炎威次第に衰へて、大空の色

いつしか鏡の如く明らかになり、爽かなる初秋の風の野をわたる頃になり、鎮守の宮の馬場、西北の山裾なる水車小屋に通ふ土堤、田圃の中の小渠の縁などに、眼の覺むるやうなる眞紅の曼珠

沙華は、眞直なる細莖を抜きて咲きつつ、うら盆過ぎて月曆八朔の頃より、一しきり盛んに出づる赤蜻蛉は、沍えたる初秋の日を浴びて、その花の上に群れ飛べる村里の野末の光景、そぞろに想起され候。其等の光景の間に遊び暮らしたりし吾が幼時の心は、今に至りて明かに懐しき追憶となりて残り居り候。

小生先般、三箇月の山居を果して、叡山を下りて歸洛せんとする際、江州坂本日吉の馬場にて、この花の咲けるを見て、ふと如上の遠き往時を憶ひ出で申候。この花は年中大都會の中に在りて暮らす者には、終に見る機會もなく過ぎ申候。吾等先日坂本にて見たるは、何年ぶりなりし



華沙珠曼

か記憶致さず、多分前申し通り、二十餘年前の幼時に、故郷の野邊にて見し以來の事と存候。それ故に、かゝる多くの人の殆ど見向きもせざる野花に、心を惹かれたるものならんと存候。

曼珠沙華の生花を室内にて眺むることは、いかなれども、かく油畫にして壁間に掲げ、この花によりて吾が往時を追憶するは、吾が唯今の單調枯淡なる生活に、少しなりとも潤あらしむる手段と存じ、貴君にこの畫の創作を囑したる次第に候。人に見せんとするにもあらず、ただ吾が記憶に感興を生ぜしむれば足り候。然るになかく巧みなる出來榮えにて満足に存候。

私事、先月十三日より輕微なる風邪にて引籠り居り候。昨年、は丁度今時分、歸郷の折柄、流行の世界風邪に罹り、五六日間臥褥致候。今年はやうの事なきやう、随分用心致し居り候。十月なかばの小春日の暖さに、つい薄着をしながら假寝したる間に

引きしものと覺え候。家にばかり閉ぢ籠り候間にも、四圍の風物次第に移り、二階の窓より眺むる東山の樹々、連日色づき申候。吾等随分長く京都に逗留致候へども、未だ八瀬大原を知らず候へば、この秋は必ずそなたへ出遊致度存じ居り候。さだめし野趣深き事ならんと存候。帝國美術院展覽會、十一月二十七日より十二月十一日まで、當地にて開かれ候由の廣告ビラ、其所此所の街辻にかかり居り候。その頃ぜひ御入洛相成度、今より御待ち申居り候。展覽會の外にも、京都には繪畫を鬻ぐ商店、祇園あたりに少からず、それ等をのぞき歩くも興多く候。貴君にはまた格別の事と存候。駿河屋の飴、虎屋の饅頭進呈致候御笑納被下度候。草々

十一月五日

京都東山のほとりより

秋 江

鴨 長明

鎌倉時代の歌人
晩年日野山の庵
に住んだ
建保四年歿（年
六十三）

一九 日野山の奥

鴨 長 明

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べる
ことあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をい
となむが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、また百分が
一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々にかたぶき、住家
は折々に狭し。その家のさま世の常ならず。廣さはわづかに方
丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造
らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛けがねをかけた
り。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め
造る時、幾ばくの煩がある。積むところ僅かに二輛なり。車の力
を報ゆる外は、さらに他の用途いらす。
いま日野山の奥に跡をかくして、後、南に日がくしをさし出して、

竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、うちには西の垣に添へて
阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間のひかりとす。
かの帳の扉に普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上
にちひさき棚をかまへて、黒き皮
籠三四合を置く。すなはち和歌
管絃、往生要集ごとき抄物を入
れたり。かたはらに箏、琵琶、おの
おの一張を立つ。東にそへて、藤
のほどろを敷き、つかなみを敷き
て夜の床とす。東の垣に窓をあ
けて、こゝに文机をいだせり。枕
のかたにすびつあり。これを柴
折りくすぶるよすがとす。庵の北
に少地を占め、あばらなる姫垣
をかこひて園とす。すなはちもろ
くの藥草を植ゑたり。假の



鴨 長 明

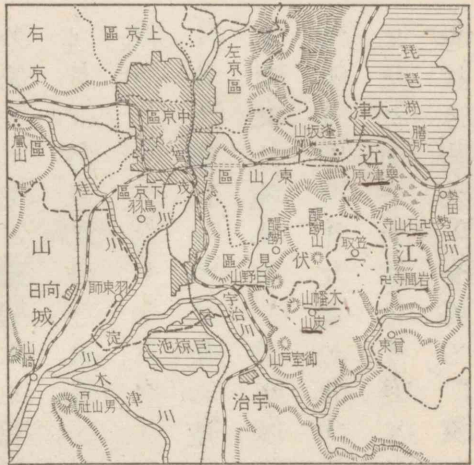
庵のありさまかくのごとし。その處のさまをいはば、南に笕あり。岩をたゞみて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。観念のたより無きにもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くにして西の方にほふ。夏は時鳥を聴く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は蝸の聲耳に満てり。空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休みみづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。かならず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らむ。もし跡のしら波に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船をながめ

満沙彌
俗名笠麻呂
養老五年出家
同七年筑紫觀世
音寺の別當とな
つた
源都督
源經信
琵琶の hands
承徳元年歿

て満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江をおもひ遣りて源都督のながれをならふ。若しあまりの興ある時は、しばし松のひびきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳をよろこばしめむともあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じてみづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれづれなる時は、これを友として遊びありく。かれは十六歳、われは六十。その齡ことの外なれど、心をなぐさむることはこれおなじ。或はつばなを抜き、岩なしを採る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの田ゐに至りて、落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀ちのぼりて、はるかに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥

羽羽束師を見る。勝地は主なければ、心をなくさむるに障りなし。あゆみわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つづき、炭山を



日野山附近の略図

越え、笠取を過ぎて、岩間にまうて、石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓をたづね、かへるさには、をりにつけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、かつは家苞土産にす。もし夜静かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖土産をうるほす。草むらの螢は遠く、真木の島のかがり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴くを聞きて、父か母かとうた

がひ、峯のかせきの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火を掻きおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知られむ人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを経たり。假の庵もや、古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして、數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。度々の炎上えんじやうに亡びたる家、又いくそばくぞ。ただ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

— 方丈記 —

二〇 鋏を持つ英雄

ロビンソンクルソーが漂流して、自分一人の生活を発見したとき、第一に困つたのは、食物であり、衣服であり、住居であつた。それは禽獸にひとしい生活であつた。

これを見ても、人間が自立自存するには、一個人としては、どんなに困難であるかがわかる。

自分一人が生きるためには、世の中の何百萬人の人が働いてくれたことの一部によつて生活をして居るのである。このことはつきり考へねばならぬ。

従つて、自分の生活する仕事即ち職業は、勿論生活の手段ではあるが、それは決して生活のためばかりでなく、その職業は、自分を生かすとともに他人を生かすことであることを考へねばならぬ。

五尺の體軀は小さいけれども、その五尺の體軀は、世の中の人のため、衣食住、何ものかを供給してゐる。

自己のみを中心として考へれば、食ふことに困らねば、働かなくともよいといふ誤謬に陥る。

自分の生きることとは他人を生かす。この點、職業の意義をはつきりさせて置かねばならぬ。

職業の苦勞努力は、その中に非常な意義と楽しみとを発見しなければならぬ。勤勞を楽しみながら、身を立て、世の人からは敬はれ、後世に至つて感謝される人となるやうでなければならぬ。感謝されることを目的とするのではない。自分が生きることが他人を生かすこと——この新しい人生觀を持つて、新しい意味での英雄となることを勤勞の目的とすべきである。

明治維新以來、歐米の文明が非常な勢で侵入してきた。

これは大變結構なことである。わが國現代の文化も歐米の文明に負ふところが大へん多い。

しかしながら、歐米の文化は物質文明である。歐米文化がはいつてきたために、生活標準が漸次高くなつてきた。二三十年前と今日とは生活上に非常な變化がある。

これが悪いといふわけではない。今更われわれの生活を二十年三十年の既往にかへすことは、不可能のことであり、また良いこととであるともいへない。

ただ物質文明が非常に進んできた現代の人々に、生活の目的は何か？といふことをあらためてはつきりさせることが必要である。

近世に於て、物質主義と個人主義との文明が發達し、世界を風靡し、既往百年位経過した。このことは決して悪いことではなかつ

た。

壓迫せられた封建時代から脱出して、その壓迫がとりはらはれて、各人が自由に競争することが出來、各々の能力を伸ばして競争した。その結果が、今日の進歩した時代を現出したのである。

が、この個人主義物質主義は今日では行き詰つた。このやうな主義では世界の平和はもたらされないのみならず、各個人の幸福も亦もたらされないことゝなつてしまつた。

現代の産業はひとり農村といはず、工業も商業も漸次組合の結成を必要とする。従來の個人主義ではこの現代に最も必要な組合の結成が不可能である。時代は進み、個人主義精神から共同精神にうつりつゝある。自分を生かすといふことのみを考へる時、個人主義に一面の眞理があるけれども、そのまゝ何處までも進めば、遂に共同出來ないのである。ここに於て共同生活と個人生活

との連繫をはつきりつかまなくてはならぬ。そこに洗煉された個人主義(共同生活の一員である自分一人)が即ち共同主義の自分であることを知るのである。又そこに、勤勞即ち充實した人生そのものと考へることが出来るのである。

現代には、自分の仕事は生活の手段であつて、自分の生活はその時間以外であるといふ考の人が相當澤山ある。日本ばかりではなく、物質文明の進んだ國ほど、その一部になかなか多い。この物質文明からくる人生觀の大錯誤(大過失)を打破しなければならぬ。

それがためには、勤勞即ち「樂しみ」と考へるやうにすることであるが、それに二つの考へ方がある。

一、勤勞は、自分の生きる手段であるのみならず、天下を生かすことであると考へること。

二、勤勞生活を務めてあり、義務であると考へずに、仕事を自分の

愉快な生活として、何か研究工夫して、新機軸を出さうと考へること。

研究工夫といふことには、自分の精神の創作があらはれてくる。



曾國藩

人間にとつては自己の創作、創造ほど愉快なことはない。創作するとき勤勞即ち「樂しみ」である。この考によつて勤勞の苦しみを「樂しみ」とすることである。

曾國藩は、支那清朝末期の大人物である。彼は大學者であり、大政治家であり、大軍人であつた。

長髮賊の亂を平定し、末期の清朝をよくさへた人である。その日記は有名なものであるが、六十一歳の時の彼の日記の一節にかういふ意味のことがある。

長髮賊の亂
清の宣宗の時洪
秀全の起した亂

「自分の見聞したもので、一藝一能に達した者で勤勞を厭はぬ士は、必ず相當の位置を得てゐる。たとひ一藝一能の士でも苦勞を厭ふ者は、大部分は失敗し、成功しても永續きがしてゐない。依つて自分は六十一歳になるが一日中必ず何か勤勞する。

「一日なさざれば一日食はず。」禪門の大徳、百歩和尚の談もこれと同じ意味である。

殊に農業ほど勤勞を必要とし、創造創作の機會を多く持ち、自己のためになると同時に、世の中のためになるといふことがはつきりしてゐる職業はない。

而も新しい目標、共同主義、共同生活を實行し、共同生活を確立するの一番便利なのは農村である。今後の社會の進歩改善をして行く策源地は何より農村である。新しい人生觀が農村から生まれ、來、新鮮な人生の目標が農村に高く掲げられなければなら

ぬ。といつて私は都會を無視するわけではない。都會の工業が盛んであればある程、これを培養して行くのは農村である。農村と共に、都會も農村の精神を以て進まなければならぬと思ふ。徒らに時代の尖端が示す物質文明の國を、これこそわれわれの求むべきものであり、進むべき道であると思ふことは大いなる間違ひである。

また新しい人生觀、共同主義の訓練、習慣をなすには、青年團ほど相當な團體はない。自治共同は從來のやうな空漠とした共同でなく、産業そのものに即した自治共同であつて、自分の社會的立場をはつきり自覺する者によつて結ばれた共同でなければならぬ。青年團ばかりでなく、壯年團の組織もまた肝要なことである。

青年諸子よ！來るべき時代は諸君の時代である。その時こそは、正しからざるものは除かれ、濁れるものは清めら

れ、沈滞せるものは潑刺となり、摸倣は獨創にその光を奪はれ、怠惰は努力にその席を譲り、抗争と紛亂とは、整調と諧和とが執つてかはるのでなければならぬ。

英雄よ出でよ！自然に鉄をかついだまゝの英雄よ出でよ！かういふ英雄であれば努力によつて誰でもなり得る。各自の仕事の中で、たまたま天下を刮目せしむることが出来れば、これ天下の英雄である。しかし天下を刮目せしむるか否かは問題でない。天に一物を加へ得たるもの、これ英雄である。

天下にこの氣溢るゝのとき、國家の充實もまた非常なものがある。世界の何物をも恐れない。

英雄兒よ、出でよ、次の時代に着目して、職業の上に、新しい人生觀を確立する英雄兒よ！出でよ！

—後藤文夫の講演に據る—

二二 名 月

芭蕉
松尾氏
伊賀の人
元祿七年歿

芭蕉

其角

榎本氏
江戸の人
寶永四年歿

其角

筆蹟

雨冷に羽織を夜の
養ならん
其角



其角筆蹟

嵐雪
服部氏
淡路の人
寶永四年歿

嵐雪

黄菊白菊その外の名はなくもがな

丈草

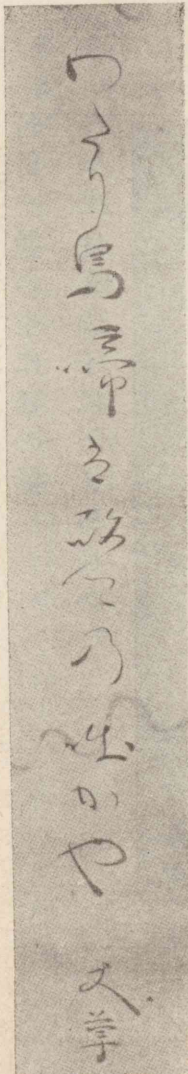
内藤氏
尾張の人
元禄十七年歿

ふとん着て寝たる姿や東山
行燈にとぶや袂のきりぎりす
幾人か時雨かけぬく瀬田の橋

丈草

筆蹟

わたり鳥啼は故郷の咄かや
丈草



丈草筆蹟

去來

向井氏
肥前の人
寶永元年歿

秋風や白木の弓に弦はらむ
應々といへど叩くや雪の門

去來

惟然

廣瀬氏
美濃の人
寶永七年歿

別るゝや柿食ひながら坂の上
水鳥やむかふの岸へつういく

惟然

凡兆

春花園と號す
加賀の人
歿年不詳

百舌鳥なくや入日さし込む女松原
ながくと川一筋や雪の原

凡兆

筆蹟

山吹のつばきも
青し芳野河
凡兆



凡兆筆蹟

越人

越智氏
肥後の人
元禄十五年歿

霧はれて棧は目もふさがれず
初雪を見てから顔を洗ひけり

越人

二二 長柄堤の曙

坪内逍遙

晨雞再び鳴いて残月薄く征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや
分れゆく横雲や残んの星を一つづつ鐘が消し行くいなめの

呼の雄氏
名は雄藏
逍遙は號
岐阜縣の人
文學博士



長柄堤
今の大阪市北區
と西成區との間
長柄川の堤
茨木
大阪府三島郡茨
木町

長柄堤に秋^{アキ}爛^{ラン}けて、一村^{イツン}蘆^{アシ}に風黒く、有明^{ユウメイ}凄^{セイ}き大川^{オホカハ}水逝^{スイ}きて歸^キらぬ浪^{ナミ}の音^ネ狭^セ霧^{キリ}に咽^{ノド}び白^{シロ}けゆく千草^{チグサ}が蔭^{カゲ}の蟲^{ムシ}の聲^{コエ}哀^{アハレ}はいとゞまさるらん。片桐^{カタナギ}市正^{イチマサ}且^ナ元^{ゲン}は居城^{イキヤウ}茨木^{イツキ}へ立退^{タテヒ}かんと、從^{ツグ}ふ郎黨^{ロウタク}一^{ヒト}百餘^{ヒャクヨ}人^{ヒト}丑^{ウシ}の刻^キに邸^セを立つて、大阪^{オホサカ}城^{ヤウ}をあとになし、列^{レツ}を正^{ただ}してしづしづと長柄^{ナガヘ}堤^{ツツ}に差懸^{サス}る。〔中略〕

後^{ノチ}には何か一^{ヒト}思案^{シアン}、寂然^{シツゼン}として駒^{コマ}立つる長柄^{ナガヘ}堤^{ツツ}の有明^{ユウメイ}がた、時^{トキ}に轉^マる小鳥^{コトリ}の聲^{コエ}、川霧^{カハキリ}やうく晴^{ハレ}れゆけば、遠樹^{トウジュ}模^モ糊^コとして幹^ミを分^{わか}ち、ほの見^ミえ渡る^{ワタル}、賤^セが屋^ヤに一筋^{イツスジ}騰^{トウ}る朝煙^{アサエビ}、くたかけの聲^{コエ}勇^{ユウ}ましく、生氣^{シキ}溢^トる、東^{ヒガシ}の空^{ソラ}には似^にぬや入^いる方^{かた}の月^{ツキ}すさまじき柳蔭^{ヤナギノカゲ}、枯^カ葉^ハ枝^エ疎^スにして風飄^{フウヒ}々^々、見る目^めも昏^{くら}し、遠方^{トウホウ}におぼろくと現^ある、名^なにおほ阪^{ハツ}の四衢^{シヨク}八街^{ハチガイ}、悄然^{シヤウゼン}として寂^ししげに一棟^{イツトウ}高く聳^そゆるは、市^{いち}、お、あれこそはお天守^{アメノウ}ぢやなあ。南山^{ナンサン}不落^{フツラク}と祝^{いわ}はせられ、千萬^{チマン}年の後^{ノチ}までもと築^{つく}かせられし大阪^{オホサカ}城^{ヤウ}故殿^{コテン}下^ノ薨^しれさせたまひて後^{ノチ}

加藤肥州
加藤清正
肥後守

千姫君
徳川秀忠の女
秀頼の室
毘盧舍那佛
京都方廣寺の大
佛をさす

まだ程もなきに礎^{イソ}ゆらぎ、諸大名^{シヨウダイメイ}の心^{ココロ}は離^{わか}れ、取りわけ加藤^{カトウ}肥^ヒ州^{シュウ}逝去^{シヨクイ}の後は、思慮^{シヨ}ある者^{モノ}には堅節^{ケンセツ}なく、義勇^{ギユウ}を存^{ぞん}ずる者^{モノ}才略^{サイリョク}乏^乏しく、阿附^{アツク}黨^{タク}同^{トウ}して相鬪^{アヒコウ}げば、大政^{オホサイ}所^{ショ}の御方^{ミカタ}さへ、當家^{トウカ}を餘所^{ヨリ}にみそなはし、浮世^{ウキヨ}離^{わか}れし御^ミ有^ア様^{サマ}。唇^{クハ}齒^シ已^やに亡^なぶ。今^{いま}にもあれ事^{コト}起^{おこ}らば、金城^{キョウシウ}湯池^{トウチ}もその甲斐^{カイ}なく、

いひかけて聲^{こゑ}曇^{くも}らせ、

市^{いち}須彌^{スミ}より重^{おも}き御遺命^{ミノイメイ}、夢聊^{ユメリョウ}かも忘れざれど、御運^{ミノウチ}の末^{すえ}か、情^{なさけ}なや、この且^な元^{もと}がすること、爲^なすこと、いすかの嘴^{くちばし}とくひちがひ、兩家^{リウカ}を繋^{つな}ぐ絆^{はな}にもと迎^{むか}へ奉^{たが}りし千姫^{チヒメ}君^{キミ}は、東西^{トウシ}不^ふ和^わの導火^{ドウカ}となり、毘盧^{ヒロ}舍^{しゃ}那^な佛^{ぶつ}の御胸^{ミノムネ}にも、大慈^{オホニギハヤヒ}大悲^{オホニギハヤヒ}は宿^やらざるか。『御家^{ミノケ}長^{ナガ}へに康^{やす}かれ。』と祝^{いわ}ひし文字^{モンジ}が本^{ほん}となり、降^{くだ}つて涌^わいたる難^{なん}



(在 堤) 城 阪 大

題は、只前門の虎にして後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら、

怖へず馬よりとび下り、彼方に向ひ平伏なし、

市「是しかしながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罌に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元がこの腸はちぎるゝばかり、償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く両手をつき、人目なければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ、我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なきことどもぢやなあ。」

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせ

ず只一騎、残霧つんざき一散に、汗馬に、中を走り來る木村長門守
重成、

長「市正殿に候な。」

市「長門殿待ちかねしぞ。」

いふ間にか、け寄るくつわ

づら、右手におり立ち顔見

合せ、言葉はなくてそら

にもまづ袖濡るゝ、朝露や、

風飄々たる枯柳の枝、入り

がたの月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを長柄堤に留むらん、

長「最早豊臣の御社稷も愈末となつたるか、棟梁とたのむ足下まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは、

某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の



(劇) 重成と元且

織田入道
織田信雄常眞入道
寛永七年歿

その間に思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ふ甲斐なさ。

悔むを且元押宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや、豫ても屢申せし如くお家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば破綻生

ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆泡沫。大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。

長「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」

市「されば、今御城に、兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某之を慮り、萬一の備をなし置きたり。」

長「してその智謀の將とは。」

市「いま九度山に隠れ忍ぶ、信州上田前の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戦以來關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺へるを、先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以ていそぎ彼を招かるべし。合

九度山
和歌山縣伊都郡
九度山町
高野山の北口
眞田安房守
名は昌幸
慶長三年歿

戦の進退は一切彼の人に任せられよ。その他關ヶ原の一亂以後浪々なせし長曾我部盛親まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次いづれも得易からぬ良將なるが豫て因みは附け置きたり。上御使を以て招かせられなば心を傾け馳參ぜん。これ第一の手配なり。」

長「してまた籠城となつたる曉敵を防がん手配りは。」

市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業のためと伴り、紀州川の川上より浪華津に押流させ、御船入りに積置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。」

長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。」

市「甲冑兵具も乏しからず。」

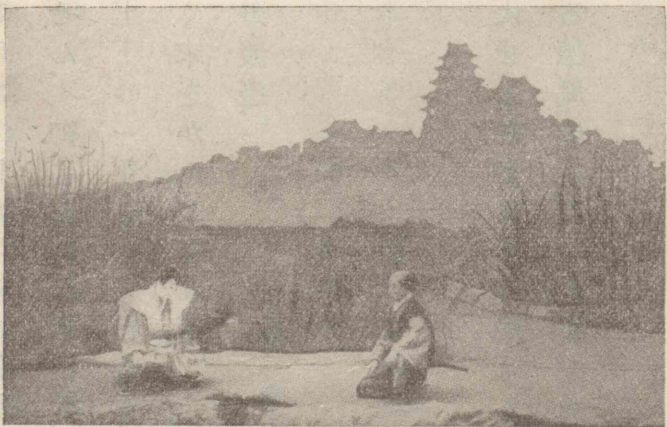
長「城は名に負ふ南山不落。」

市「真田後藤の智勇をもて、この堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときは、」

長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、」

市「なか／＼三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」

長「まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我亦一方を承り、速水御宿和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹翫さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結君臣將士



(面臺舞) 別訣の堤柄長

心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰せに従ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ市正殿。」

市「ほ、頼もし、頼もし、只大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。」

とはいひながら、往時に照し、成行く末をかんがみれば、

長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊。」

市「上御發明に渡らせらるれど、」

長「讒佞之を蔽ふが故。」

市「地の利はあれども人の和なく、」

長「故太閤が御威武にをの、き震ひ打伏せし六十餘州の民草も、」

市「天の時にや、大御所のおのづからなる徳風にいつしか靡く世の有様。」

長「如何なれば、かくまでに、御運かたぶく西天の。」

市「有明の影薄れつ、」

長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、」

市「新日、東天に昇るといふ。」

長「世の成行の。」

二人「影なるか。」

是非もなき世の有様と、入る方の月ながめ入り、しばしは愚痴におちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのくと明けにけり。

一桐一葉

二二 恩賜の御衣

(大)

鏡

醍醐の帝の御時、時平の大臣、左大臣の位にて、年いと若くおはします。菅原の大臣は右大臣の位におはします。そのをり、帝御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下させた

まへりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかりなり。右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしましけむ。共に世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はざえ世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはします。左大臣は御歳も若く、才



(筆邦雅本橋) 眞道原菅

もことの外に劣り給へるによりて、右大臣御覺えことの外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出て来て、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて流され給ふ。この大臣、子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは

昌泰四年
醍醐天皇の御代

己巳
己巳
己巳

皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなむ」と公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもも同じ方にだに遣はさざりけり。方々にいと悲しく思召して、御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

又亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑になりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なき事により、かく罪せられ給ふをからく思し嘆きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、哀れに心細く

山崎
今の京都府乙訓郡大山崎村山崎

亭子の帝
宇多法皇

おぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくくと

隠るゝまでもかへりみしはや

また播磨の國におはしましつきて、明石の驛といふ處に御宿り
せしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて作らせ給
へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

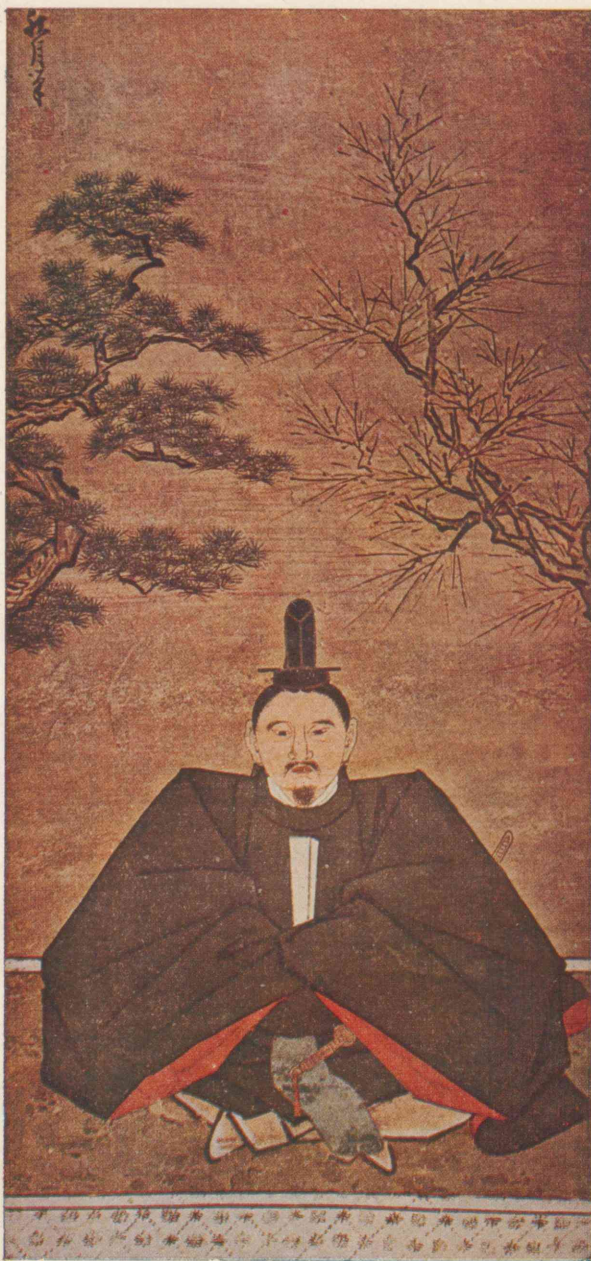
かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるゝ
夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり

なげきよりこそもえはじめけれ

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれとびゆく雲の歸り來る



(筆月秋僧) 公 菅

大貳
太宰大貳藤原興
範

観音寺
福岡縣筑紫郡水
城村観世音寺

かげ見るときぞなほ頼まるゝ

さりともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゝへる水の底までも

きよき心は月ぞてらさむ

これいとかしこくあそばしたりかし。げ

に月日こそは照し給はめとこそはあめれ

筑紫におはします處の御門もかためて

おはします。大貳の居處は遙かなれども、

樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じや

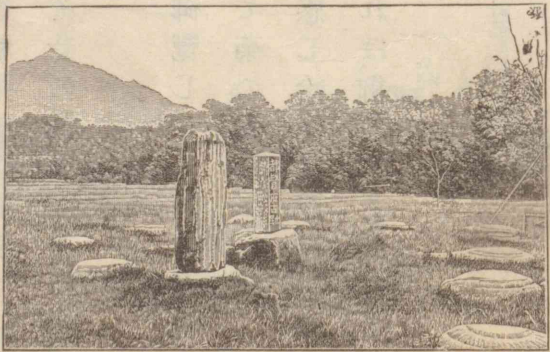
られけるに、又いと近く観音寺といふ寺の

ありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ

給へる詩ぞかし。

都府樓纒看瓦色

観音寺只聽鐘聲



都督府跡

文集
白氏文集
七十一卷
白居易
字は樂天
唐の詩人

三三 恩賜の御衣

これは「文集の白居易が『遺愛寺、鐘敬枕、聽香爐峯、雪撥簾看。』といふ詩にもまさるまに作らしめたまへり。」とこそ昔の博士どもは申しけれ。

またかの筑紫にて九月十日の菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはし、とき九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らせ給へりける詩を、帝かしく感じ給ひて、御衣賜はせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽するに、いとそそのをり思召し出でて作らせ給ひける。

去年、今夜侍、清涼。 秋思、詩篇獨、斷腸。

恩賜、御衣今在此。 捧持、毎日拜、餘香。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。

かくて、このおとゞは筑紫におはして、延喜三年癸亥二月二十五日にうせたまひしぞかし。 御年五十九。

延喜三年
醍醐天皇の御代



三木 露風
名は探
兵庫縣の人
詩人

二四 青空の鐘

青空の

高きところ

鈴形の鐘懸かる

あはれその

鐘の音よ

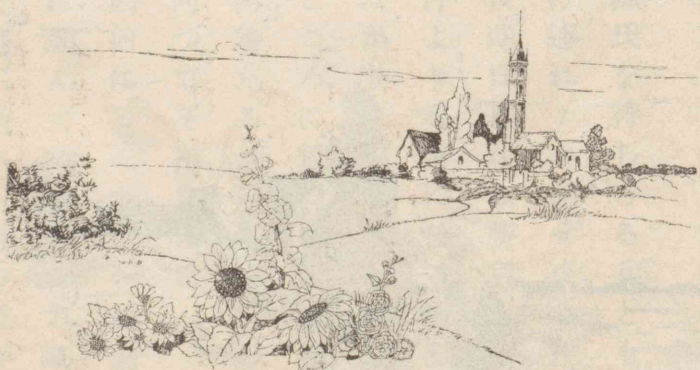
こゝろに染みてひびく

鳴り鳴りて一の聲は

望の果に

ひろがりゆき

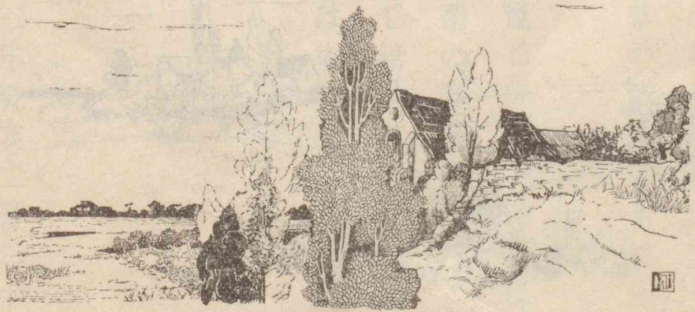
三木 露風



鳴り鳴りて二の聲は
朝暾に覺めし村々と都の方の
生活の中に落つ

あはれその
鐘の音ぞ
和平と飛躍とを傳ふなる

氣晴れて
深碧の高きところ
鈴形の鐘懸かる



—信仰の曙—

二五 那須與一宗高

(平家物語)

さる程に阿波讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯こゝの洞より十四五騎二十騎打連れ、馳せ來る程に、判官程なく三百騎になりたまひぬ。今日は日暮れぬ勝負を決すべからず、とて源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。あれは如何に。と見るところに、船の中より年の齡十八九許なる女房の、柳の五衣に紅の袴着たるが、眞紅の扇の日出したるを船のせがいに挟みたて、陸へ向つてぞ招きける。判官、後藤兵衛實基を召して、あれは如何に。とのたまへば、射よ、とこそ候はめ。たゞし大將軍の矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇

をば射させらるべうもや候らん。」と申しければ判官味方に射つべき仁は誰かある。」と問ひたまへば、手だれども多く候なかに、下野國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵にては候へども、手はきいて候。」と申す。判官證據があるか。「さん候。かけ鳥などを争ひて三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

與一、その比はまだ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の錦を著ておくびはたそでいろへたる直垂に、萌黄緘の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合せてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。滋籐の弓、脇に挟み、甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏まる。

判官、いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。」と宣へば、與一、仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き

味方の御弓矢の疵にて候べし。一定仕らんずる仁におほせつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大いに怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義経が下知を背くべからず、それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾く疾く鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。

與一、重ねて辭せば悪しかりなんとやおもひけん。「さ候は、外れんをば存じ候はず、御誕にて候へば仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷りたち、黒き馬の太く逞しきにまろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向つてぞ歩ませける。味方の兵ども與一が後を遙かに見送つて、この若者一定仕らんずると覺え候。」と申しければ、判官も頼しげにぞ見たまひける。矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたれども、猶扇のあはひは七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。

比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟は揺りあげ揺りすゑ漂へば、扇も申に定まらずひらめきたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴ならずといふことなし。

與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光權現、宇都宮、那須湯泉大明神、願はくはあの扇の真中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して人に再び面を向くべからず。今一度本國に歸さんと思召さば、この矢はづさせたまふな。と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一鎗を取つて番ひよつ引いてひようと放つ。小兵といふ條十二束、三つぶせ、弓は強し、鎗は浦響く程に長鳴りして、過たず扇の

要際一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鎗は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉、二揉揉まれて海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり。陸には源氏籠を敲いてどよめきけり。

二六 夢應の鯉魚

上田 秋 成

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。常に畫く所、佛像、山水、花鳥を事とせず。寺務の暇ある日は、湖に小舸をうかべて、網引釣する泉郎に錢を與へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、その魚の遊ぶを見ては、畫きける程に、年を経て精しきにいたりけり。或時は繪に心を凝して眠をさそへば、夢の裏に江に入りて、大小の魚と共に遊ぶ。覺む

上田秋成
大阪の人
國學者
小説家
文化六年歿(年
七十八)
延長
醍醐天皇の御代
の年號
三井寺
滋賀縣大津市に
ある園城寺

ればやがて見つるまゝを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名づけり。その繪の妙なるを感じて、乞ひもとむる者前後を争へば、只花鳥山水は乞ふに任せて與へ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人毎に戯れていふ、生を殺し鮮を食ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必ずしも與へずと。その繪と俳諧と共に天下に聞えけり。一年病にかゝりて、七日を経て忽ちに眼を閉ぢ、息絶えて空しくなりぬ。徒弟友どち集りて、歎き惜みけるが、只胸のあたりの微し暖かなるにぞ、若しやと居めぐりて守りつゝ、三日を経けるに、手足すこし動き出づるやうなりしが、忽ち長嘘を吐きて、眼を開き、醒めたるが如くに起きあがりて、人々に向ひ、我人事を忘れて既に久しき日をか過しけん。衆弟等いふ、師三日前に息絶え給ひぬ。寺中の人々を始め、日頃睦まじく語り給ふ殿原も詣で給ひて、葬の事も計り給ひぬれど、只師が胸の暖かなるを見て、柩に藏めてかく守

り侍りしに、今や蘇りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよ。」と



いひて悦びあへり。

興義點頭きていふ、誰にもあれ一人、檀家の平の助の殿の館に詣りて原申さんは、「法師こそ不思議に生き侍本れ。君今酒を酌み、鮮けき鱠を作ら挿しめ給ふ。しばらく宴を罷めて寺繪に詣でさせ給へ。稀有の物語聞えまゐらせん。」とて、彼の人々のあるさまを見よ。我が詞につゆ違はじ。」といふ。使異しみながら、彼の館に往

きて、その由をいひ入れて、窺ひ見るに、主の助を始め、令弟の十郎、家子掃守など居めぐりて、酒を酌みゐたる、師の詞の違はぬを奇とす。

彼の館の人々この事を聞きて大いに異しみ、先づ箸を止めて、十郎掃守をも召具して寺に到る。興義枕をあげて、路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述べ。

興義先づ問うていふ、君試に我が言ふ事を聞かせ給へ。かの漁父文四に魚を誂へ給ふことありや。助驚きて、まことにさることあり。いかにして知らせ給ふや。興義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて、君が門に入る。君は賢弟と南面の處に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大きなるを啗ひつゝ、奕の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高杯に盛りたる桃を與へ、又杯を賜うて三獻飲ましめたまふ。膾手したり顔に魚を取出でて鱸にせしまで、法師がいふ所違はでこそあるらめ。といふに、助の人々この事を聞きて、或は異しみ、或は心地惑ひて、かく詳なる言の由を頻りに尋ぬるに、興義語りていふ、我この頃病に苦しみて堪

へ難きあまり、その死したるをも知らず、熱きこゝち少し冷さんものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲居に歸るこゝちす。山となく里となく行きくゞて、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に、浴びて遊ばんとて、そこに衣を脱捨て、身を跳らして深きに飛入りつゝ、彼此に泳ぎめぐるに、幼きより水に慣れたるにもあらぬが思ふに任せて戯れけり。今思へば愚なる夢ごころなりき。されども人の水に浮ぶは、魚のこゝろよきにはしかず。こゝにて又魚の遊を羨む心起りぬ。傍に一つの大魚ありていふ、『師のねがふこといと易し。待たせ給へ。』とて遙かの底に往くと見しに、しばしして、冠裝束したる人の前の大魚に跨りて、許多の鱸魚を率ゐて浮び來り、我にむかひていふ、『海若の詔あり。老僧かねて放生の功德多し。今江に入りて魚の遊躍をねがふ。かりに金鯉が眼を授けて、水府の樂み

長等の山 三井寺の西にあ
 たる
 志賀の大曲 今の唐崎附近か
 といふ
 比良の高山 滋賀縣滋賀郡に
 ある山
 堅田 琵琶湖の西岸に
 ある
 鏡の山 滋賀縣蒲生郡に
 ある山
 竹生島 琵琶湖中にある
 島
 伊吹 滋賀縣坂田郡に
 ある山
 矢橋 滋賀縣栗太郡老
 上村
 瀬田 滋賀縣栗田郡瀬
 田町

をせさせ給ふ。たゞ餌の香しきに味まされて、釣の絲に懸り、身を
 喪ふことなかれ。」といひて、去りて見えぬ。不思議のあまり
 に、おのが身を顧みれば、いつのまにか鱗、金光を備へて、一つの鯉魚
 と化しぬ。あやしとも思はで、尾を振り、鱗を動かして、心のまゝに
 逍遙す。まづ長等の山、風立ちある浪に身をのせて、志賀の大曲の
 汀に遊べば、歩人の裳の裾ぬらすゆきかひに驚かされて、比良の高
 山影、映る深き水底に潜くとすれど、かくれかた田の漁火によるぞ
 うつゝなき。ぬば玉の夜中の鴻に宿る月は鏡の山の峯に澄みて、
 八十の湊の八十隈もなくしておもしろし。沖津島山、竹生島、波にう
 つろふ朱の垣こそ驚かるれ。さしも伊吹の山風にあま小舟も漕
 出づれば、葦間の夢さまされ、矢橋の渡する人の水馴棹を遁れては、
 瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたゝかなれば、浮び、風
 荒きときは千尋の底に遊ぶ。俄かにも飢ゑて食ほしげなるに、彼

此に漁り得ずして、狂ひゆくほどに、たちまち文四が釣を垂るゝに
 あふ。その餌はなほだ香し。心又河伯の戒を守りて思ふ、「我は佛
 の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なぞもあさましく魚の
 餌を吞むべき。」とて、そこを去る。しばしありて飢ますゝ、甚だし
 ければ、かさねて思ふに、「今は堪へがたし。たとひこの餌を吞む
 とも、嗚呼に捕られんや。もとより彼は相識るものなれば、何の
 はばかりかあらん。」とて、つひに餌を吞む。文四はやく絲を收めて
 我を捕ふ。「こはいかにするぞ。」と叫びぬれども、彼かつて聞かず顔
 にもてなして、繩をもて我が鰓を貫き、葦間に船を繋ぎ、我を籠に押
 入れて、君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に突して遊ばせ
 給ふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人
 人大きに感でさせたまふ。我その時人々にむかひ、聲を張りあげ
 て、「かたゞらは興義をわすれたまふか。宥させたまへ。寺に

かへさせたまへ。」と頻りに叫びぬれど、人々知らぬ形にもてなして、只手を拍つて喜び給ふ。膾手かしばてなるもの、まづ我が兩眼を左手の指にてつよく捉へ、右手に礪ぎすませる刀を執りて、俎さにのぼせ、既に切るべかりしとき、我苦しきのあまり大聲あげて、「佛弟子を害する例やある。我を助けよ、助けよ。」と泣き叫びぬれど、聞入れず。終に切らるゝと覺えて、夢醒めたり。」と語る。人々大きに感で異しみ、師が物語につきて思ふに、「その度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出すことなし。かゝる事まのあたりに見しこそいと不思議なれ。」とて、從者まがらひを家に走らしめて、残れる鱸あじを湖に捨てさせけり。興義これより病癒えて、はるかの後天年あひだをもて死しなりけり。その終焉はつちに臨みて、畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、畫ける魚、紙縑しんをはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。その弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院

古き物語
古今著聞集を指す

の殿の障子に鶏を畫きしに、生ける鶏この繪を見て蹴ふみたるよし、古き物語に見えたり。 | 雨月物語 |

二七 新島守

(増 鏡)

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どももあやしく艱かためり。かかれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治瀬田へ分ち遣はす。世の中ひびきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げなく騒さわぎみちたり。いかあらんと、君も御心亂れておぼし惑まどふ。豫ては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわただしく、色を失ひたる様ども頼たのもしげなし。

六月二十日
承久三年
泰時
北條義時の長男
時房
義時の弟

保元の例
保元の亂後、崇
徳院を讃岐へ遷
し奉った例

院の上
後鳥羽院
女院

七條院・承明門
院・修明門院等
をさす

鳥羽殿
京都市伏見區に
あつた離宮

ものにもがなや
とりかへすもの
にもがなや世の
中をありしなが
らの我身と思は
む(源氏物語)

六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、遂に御方の軍敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下ただ物にぞ當り惑ふ。あづ



後まよりいひおこするまゝに、かの二人の大将軍計らひおきてつつ、保元の例にや、院の上、都の外に遷上し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々、處々におほし惑ふこと更なり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、綱代車のあ

やしげなるにて、七月六日入らせたまふ。今日を限の御ありき、あさましうあはれなり。ものにもがなや、

信實

藤原隆信の子
出家して寂西と
號した
父子共に肖像畫
の能手

七條院

藤原信隆の女
後鳥羽天皇の御
生母

新院

順徳院
帝

仲恭天皇

中院

土御門院

とおぼさるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせたまふらん。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に御船に奉りて、遙なる波路をしのぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじう、いかなりける世の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや七月九日、帝をもおろし奉りき。この四月か

とよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にておりたまへるためしも、これや始なるらん。さて上達部殿上人、それより下はた残りなく、この事に觸れにし類は、重く軽く罪に當る様いみじげなり。中院は初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事いと恐あり。とおぼされて、御心もて、その

若宮
後嵯峨天皇
承明門院
土御門天皇の御
生母御名は在子

年閏十月十日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせたまひぬ。去年の二月ばかりにや若宮いできたまへり。承明門院の御兄人に、通宗の宰相中將とて、若くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りたまひて、近く侍ひける北面の下藤一人召次などばかりぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせたまふ。道すがら雪かきくらし、風吹き荒れ、吹雪して、來しかた往く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、
うき世にはかかれとてこそ生れけめ

ことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近き程に。」と東より奏したりければ、後には阿波の國に遷らせたまひにき。

六つにて位に即きたまひて、十三年おはしましき。下りたまひ

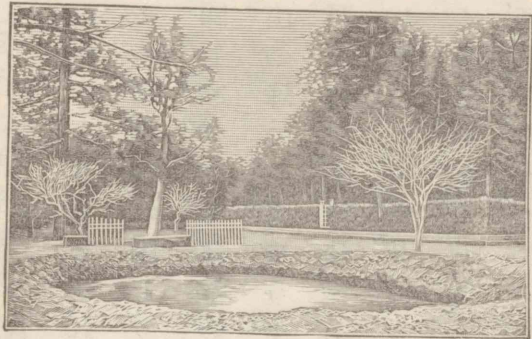
津の國のこやの
ひまなき
津の國のこやと
も人をいふべき
にひまこそなけ
れ葦の八重葦
(後拾遺集)

て後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を従へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有様に、遠きをあはれみ、近きを撫てたまふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松も、やうやう枝をつらねて千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても空ゆく月日の限知らず、のどけくおはしましぬべかりける世をありてよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苦屋に軒をならべて、おのづからこととふものとは、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとはかりながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、

明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて何時を果とか廻り逢ふべき限だになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡くし給ふべき御様ども、くち

をしともおろかなり。

このおはしますところは、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。誠に柴の庵のただしばし。とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりな



後鳥羽院行在所の址

柴の庵のただしばし

いづくにも住ま
れずばただ住ま
であらむ柴の庵
のしばしなる世
に(新古今集)

水無瀬殿

攝津國三島郡に
あつた離宮

き心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹き來るを聞きめして、

われこそは新島守よおきの海の

あらき波風こゝろして吹け

二八 蜂

佐佐木茂索

村山吾一は仲間では、相當知られてゐる洋畫家だつた。腕も可なりの腕だつたが、彼が仲間うちで相當知られてゐるのは、腕といふよりは、寧ろ彼の變に發明好きな點や、妙な事業を計畫したりする事の爲だつた。謂はば彼の有名といふのは、風變りな元來が變り物の多い洋畫家仲間でもちよつと目に立つ風變りな一言で覆ふと、彼は一種の人氣男だつた。ある年の正月、彼はその春の展覽會の製作に房州へ行つてゐた

依佐木屏寺

京都の人
文學者

が、一先づ片づいて歸つて來るとすぐ僕のところへ遊びに來た。

「君あすこはね。」と彼は云つた。「あすこはとても變な處だよ。冬だといふのに花が咲いてゐるのだぜ。何しろ冬のことだから、夏ぢやないやね。ね、冬のことだから、時々は東京みたいに寒い日もあるよ。だのに、花がふんだんに咲いてゐるんだぜ。酷くうれしくなつちやつてね、土地の者に聞くと、花は年中咲いてゐるといふんだ。變だらう？そして素敵だらう？俺は、だからよ、大金儲けを考へついたのでよ——」

かう聞くと僕は無然と形容して然るべき顔で云つた——。

「君の大金儲けか。また例の——」

彼は皆まで云はせなかつた。そののみか一層熱心に説き續けた。

「そんなのぢやないよ。今度は確實なものだ。今までの俺が

仕事しなくちやならない計畫ばかりだつたからね、だから、失敗もしたさ。だけど今度は——今度は、蜂が働くのだからね。」

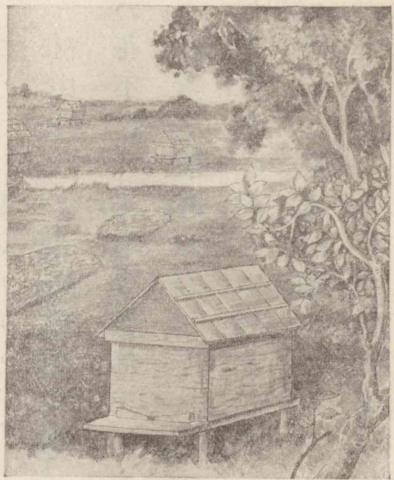
「蜂が？」

「さうさ。驚いたらう？」

村山はひどく得意だつた。彼の説に聽従するとその素晴らしき花不斷の土地で、養蜂を始めるといふのだつた。年に一度くらい蜂蜜が取れるのぢや、餘程大規模にやらない限り、内職程度にしかならないが、年中取れるからは、十分商賣になるといふのだつた。「何しろ君、蜂が働くのだからね。あの働き好きの蜂が働くのだからね。今度こそは俺も金持になるよ。そしたらお前にも工房でも書齋でも建ててやるよ。」

村山は、春の展覽會の用事が片づくると直に房州へ引返して行つ

た。勿論養蜂に従事する爲だつた。仲間うちでは「村山のやつ、また變なことを始めて、手を焼くんだぞ」と云つてゐた。さうして、彼が嘲笑の中心になつたのはいふまでもないのだつた。



半信半疑なので誰も蜜を喰ひに出かけはしなかつた。

その翌年の冬だつた。あれつきり音沙汰のなかつた村山が飄

するとその冬に村山から、事業

は大成功だ」と云つてよこした。

養「だからお前も遊びに來い、蜜をう

蜂んと喰はしてやるから」と云つて

場來た。これが傳はると仲間のう

ちでは「ほう、村山も時には成功す

るかね」と批評した。しかしなほ

然とやつて來て、

「おい、また畫だ。また描くんだよ」と云つた。「畫描きは畫だよ、」

「畫描きは畫だ？ 養蜂はどうしたんだ？」

「養蜂か。あれか。それがさ——」

村山の云ふところに據ると、最初の年は非常な成功で多量の蜂蜜を得ることが出來たのだつた。それで直ぐさま分蜂して、箱の數を二十倍にもしたのだが、何としたか翌年は少しの蜜も採れないのだつた。彼は驚いて原因を探ねようとした。彼は専門家を叩いてその説を訊いた。するとその専門家は、哈哈と笑つて村山に教へて呉れた——

「——それやあなた駄目ですよ。年中花があるのでせう？ ぢや蜂は働きませんよ。蜂が蜜を貯めるのは冬に備へるためですからね。その肝心の冬になつても花があると分つては、もうそ

の年から蜂は働きませんよ。最初の一年は知らないから成績がよかつたので、翌年は蜂が心得ちまつたのですから駄目だったのです。蜂は人間に蜜を供給する爲に勤勉なのぢやありません、彼等の自活の爲ですからね。食へれば蜂だつて働くものですか。蜂は生れつき勤勉だなんて、そんな事は嘘ですよ。」

「かうなんだからね。驚いたよ。」村山は他人の事のやうにのんきな顔をしていつた。「だから——畫描きは畫——まあ畫を描いてるんだね。」

僕は最初村山の計畫を聞いた時とは又別な意味で、憮然とした。

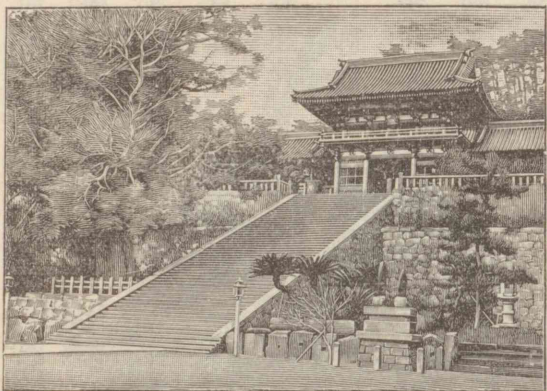
—新選佐佐木茂索集—

二九 銀の猫

上田 秋成

文治
後鳥羽天皇の御
宇の年號
鎌倉の大將殿
源頼朝

文治その年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕



鎌倉鶴が岡八幡宮

うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして疾からず遅からず、列を亂さず練りいでさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに、警衛して「あな」ただに言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。

かへりまをしして、御手輿に召させ給ふ程さとき御眈に見とゞめさせ給ひ、御階の忌垣の許に畏まり居る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、いと瘦せ黒みづきたるに衣・杖・笠なども乞食者の様したるが、目を偷みてうすずまりをる、な

ほ人ならずや思しけん、あの法師が修行するやう名をも問へ。」と仰せたらうぶ。御輿添の若侍急ぎはしり寄りて、有難く御目賜へり。何處よりの修行ぞ。名をも申せよ。」といふ。不意に驚きざまして、「雲水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて、「さればこそ聞き知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ひならで、賢き人得たる例に、誘ひ歸らん。わが後につきて來れといへ。」とて、召連れさせ給へり。

御館に入らせ、御装束改めさせたまへば、やがておほとなぶら敷多照らしかゝげたり。「けふの道行づと將てこ。」と仰せたらうぶ。法師まゐれ。」とて、御座近き一間なる所の童子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の世をはかなきものに思ひしみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎きの譽れはもの心なきあづま人さへ聞き知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂

のなかには、玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ。」と仰せたらうぶ。いみじく畏まりて、思ひかけず大木の御蔭に參り侍れば、いと



朝 頼

もかゝやかしきにぞ、たゞ夢路をたどるやうに侍りて、聞え奉るべきことも侍らず。さとき御眼に見現はされて侍るこそ、いと有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひ侍れど、かひあることも打ち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にかねて學ばせ給ふとも漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍り。大空に

お月夜

羽打ちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏し。」と申す。

うち笑ませ給ひ、弓取りし人の、もとの心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には、詠み移すまじきものに、宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬の嘶きは物とも思はぬを、この三十文字餘りの學には心の後るゝはいかに。「こは畏き御心にも、思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らして御軍には立たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々しく、調もいと高しとこそ打ち聞き侍れ。いでや歌よまんとは、ますらを心をとりに隠し、あてになよびか、にのみ詠み移すべくするこそ、この道のいみじき煩ひなれ。君がさとく猛き御心のまゝに打ちまねば、せ給はんには、今の世の人誰かは並びあへ奉らん。三尺の劔を取りて、『大風起り

大風起り
漢の高祖の作

烏鵲南に
魏の曹操の作

雲飛揚す。」とうたひ、槊を横たへて、『烏鵲南に。』と詠ぜし君たちは、鞍のうへにて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじきを磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、いづれの業にも、初めより優れたらんは、かたこそ侍らめ。」といふ。「人々あれ聞き給へ。世は捨て遁れても、たのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬる事は忘れずてぞあらん。一言にても承らばや。」こは益、恐れある御問はせなり。御物語のはてゝは、武士の道しばしも、怠らせ給はぬ御心より、野山を住所の瘦法師に、だに物問はせ給ふことの忝さよ。向ひ奉りては、をこがましく、何をかは家の傳へなりなどと聞こえ奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈

病める士卒の疽
をすぶ
周代の兵法家呉
起の故事

みをさへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を
出でたるいたづらものの、弦ひき一つだに心にとゞめしことも侍
らず。たゞ一言の忘れがたきは、『賞を重くし罰を軽くせよ。』といひ
しと、『任ずるものを辱しむれば危し。』といひし有難さよ。士卒の疽
を病めるを吸ひしは、人の心をよく買ひなすといへども、眞の情よ
りとも覺え侍らず。竈を減らして人を危きに陥るは將帥のさか
しきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず。軍を出
だし給へることの怪しきまで賢くましませるを、餘所ながら見聞
き奉るには、この方の御問ひ、免させたまへ。』とて、額を板敷に擦りつ
けて申す。

君笑みほこらせ給ひ、口とく、心さとき法師なり。今宵は月見る
夜ぞ。物語今ははたしてん。人々と土器取りはやし、曉かけて遊
ばん。まれびとは酒飲まざるべし。鹿猿の中に立ち交りて歌詠

めといふとも、詠むまじ。たゞ我が前にて遊べ。風ひや、かなる
にも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は暖かにもこそ、



(筆 齋 容 池 菊)

西 行 と 銀 猫

この火取法師に參らせよ。』とて、白
がねもて作りたる、猫の形したる
を取り傳へて、君より賜はる。』とて、
前に置きたり。『鹿猿はなほ心猛
し、鼠をだにえ捕らぬ瘦法師が
ためには、似つかはしき御賜ぞ。』と
て、三度押し戴きぬ。

あした御暇賜はりて立ち出づ
るに、御館の人やどりに、誰殿の童
ならん、括袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、これ
取らせん、火埋みて手足あたゝめよ。』とて、かのきら／＼しき物を與

へて、顧みもせず立ちぬ。童うちおどろき、これ見たまへ、見も知らぬ法師の見も知らぬものたまひつるは」とて、青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を、誰かは得させん。拾ひやしつる」といふ。「さらに、道のそらにかゝるものやはあるべき。あな恐ろし、殿に奉りてたまへ」といふ。やがて御館にもてまゐり、仕ふる君を呼び出で、しかくのことなんと申す。「いと怪し。大將殿の法師にたまひしを、いかで童には得させけん。訝し」とて、まづいそぎて聞え奉る。君うち笑みたまひ、かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。ひとたび穢れしもの、その童に取らせよ」とて、取りおろさせたまひぬ。

漢高
漢の高武帝

西行後にこの事を人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはずぞ。漢高の大度、曹孟

曹孟徳
魏の武帝

徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふことを生まれ得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔みごの、この後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは」とて、涙とゞめ難くして物がたりしとなり。心なき身にも、これを聞き傳へては、秋の夕暮ならずとも、うち擧みぬべし。一藤篋冊子

三〇 歌人西行

藤岡 東岡

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉室町の世、抑歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり」といはれしとき、稱讚の聲又定家に譲らず。近世に至つて定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書は尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に噴々たるは、抑何が故ぞ。

定家
藤原氏
歌人
新古今集の撰者

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど、義清は名利を喜ばずして常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんとして、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、『殿は昨夜頓死したまへり。』とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念さらけに堅し。官を辭して許されざれども、『棄恩入無爲』は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがれるを思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと、顧み

保延
崇徳天皇の御代
の年號

右幕下

右近衛大將源頼朝

大師

弘法大師

高尾

京都府葛野郡高尾山神護寺

もせて家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せり。と。かくて、名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさにも二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。と。一介の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠悠自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修業の外、他事あるべからず。數寄を立て、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。

「誰ぞ」と問へば「西行と申す者」といふ。文覺、手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年頃承り及びたるに、御尋ね悦びいり候」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子



文 覺

たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰せに違ひたるは」と怪しみ問ふ。文覺答へて、あらいひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面様か、文覺をこそ打たんず

るものなれ」といへりとぞ。
西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて詠じて曰く

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ



晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建

久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集

西 めたるもの即ち山家集なり。

わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後

僅かに三人、西行・宗祇・芭蕉、これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じてまた西行・宗祇が行狀を慕ひしもの

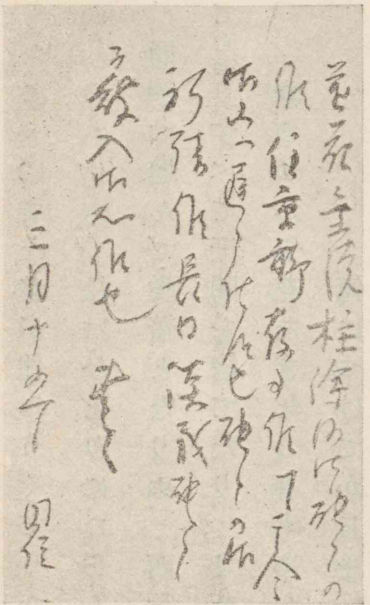
宗祇
飯尾氏
連歌の名家
文龜二年歿

とす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おのゝその道に一期を劃せし三家がいづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかにか詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

そもく、平安朝の貴紳、淑女は、鴨、桂、二川の流域、數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、情感を刺衝するものなかりければ、従つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承けた、同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、辭句の工にも、おのづから典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々として風を成せる

筆蹟

連花乘院柱繪沙汰、能々可レ候住京聊存事候て于レ今御山へ連々仕候也、能々可レ御祈請候長日談義、能々可レ被レ入二御心一候也、謹言、三月十五日、圓位



西行筆翰の第一

にすればなり。わけて西行が歌ふところ一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さ

るゝことまた宜ならずや。西行既に古來の典型を捨て、直ちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川草木を愛して、これを視ること猶己を視るが如く、同情の

念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見ん老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき

こゝにまた我が住みうくてうかれなば

松はひとりにならんとすらん

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨

てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來ん秋の今宵まで

月ゆゑをしくなる命かな

愛着は迷なり。此の雲を去らざれば眞如の月は明かなり難し

と雖も、山水もと無心にして人間の如き魔性を有せず。これを以

て窓前日夜の友とす。清深虚無一心もまた物によつて動かされ

ざること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在、こ

こに疑懼の境も去つて安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ

安く待ちつゝ、今日もくらさん

雲にたゞ今宵の月をまかせてん

厭ふとしてしもはれぬものゆゑ

西行の歌は企てゝ成すものにあらずして、自ら成れるなり。そ

のいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せん

怪しきまでに袖しをれけり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。

—國文學全史—

三一 日本精神と世界精神

藤村 作

我々は人間として生きると同時に、國民として生きねばならぬことは勿論である。近時若い一部の人達の間には、我々の國民として生きることは第二義のことである。我々は人間として生きねばならぬといつてゐる。併しながら、私の信ずる所では、我々の生活の單位は國民として生きることである。人間として生きること

ではない。どうしてさう考へるかといふと、世界には多くの民族がある。それ等の民族は特殊な血を傳へ、特殊な靈を傳へたものである。我々日本人はその中の一つである所の日本民族に屬する。我々が人間であり得るのは、日本民族であり得ることを通してでなければならぬ。日本民族でなくしては、どうしても人間たり得ることは出來ないのである。

我々の肉體は日本民族の祖先から傳へられた肉體であり、我々の靈魂は日本民族の祖先から分派し來つたものである。さうして、肉體に於ても、靈魂に於ても、あらゆる世界の他の人類から違ふ所の特徴を有して、この特徴を持つことに依つて、世界のあらゆる他の民族から特殊である。この二つの上の特徴を持つてゐるので、我々は何としても他の民族となることを得ないのである。

この同一祖先から傳へた肉體・靈魂の特徴を共通に持つてゐる

我々民族が、團體的結合をなして、その特徴に依つて特殊なる發展をなすことに努力するのは如何にも自然なことである。さうして、かういふ團結ほど世に鞏固な國家團結はない筈である。かういふ我が國の持つ特殊な血族的國家團體は、單に主權、人民、國土を三要素として成立してゐる國家とは違ふ。

我々が日本國民として世界に生きる意義、使命は、他の民族の持たない特殊な國民性、國民精神を持つて生きるといふ所にあらう。これを發展させ、又これを世界に擴充する所にあらう。我々日本人の最も長じてゐる特徴の上に創造された文化を、世界に擴げることに依つて、我々の最も大きな寄與が世界人類になされるであらう。我々にして日本精神を失墜し、日本國民性を小さくしてしまつたならば、我々の世界に生きる意義は失はれ、我々の世界人類に對する使命は滅びるであらう。この意味に於て、我々は人間と

して生きるといふことを考へる前に、日本國民として、最も正しく且大きく生きるといふことを考へねばならない。日本國民として、最も正しく、大きく生きるといふことは、日本精神を展開させ、これを世界に擴充して行くことに他ならない。

苟くも日本人として、我が祖先の肉體と靈魂とを傳へてゐるものに、幾分なりとも、日本精神を持つてゐないものはない筈である。けれども、それを確實に把持し、且それを涵養して益立派なものにして行くには、どうしても教育の力を借らねばならない。こゝに國民教育に於ける國史教育の必要があり、國語教育の必要があり、國文學教育の必要があるのである。

所がここに考ふべきことがある。世界は時を逐うて變化しつつある。時代は暫くも靜止しない。随つて世界は現状のままに長く止るものでない。國民精神は歴史の悠久を通じて一貫して

傳ふべきものではあるが、併しそれは歴史を超越して不變であるべきものではない。時代の變化に應じて、その不備不足なるものは常に補はれ、その不適當なものは適當なものに改められて行かねばならないものである。即ちその本幹は動かすべきではないが、その枝葉は常に補はれ、改められ、又その精神の表れは常に時代に應じて變化し行くのでなければならぬ。これを解り易くいへば、他の長を採つて、我の短を補うて行くべきものである。ここに於てか國民教育は國民精神の理解涵養と共に、世界精神、現代精神の理解を必要とする。

廣く世界を見渡して見れば、我々は現代に世界を通じて流れてゐる或精神を見出すことは容易である。西洋にある現象が決して西洋に限られないで、我が東洋にも波及して、日本に支那に、同じやうな現象の起ることは、一つや二つに止ることではない。交通

通信機關の發達に由つて、昨日の西洋の事が直に今日東洋に來るといふほどである。これはその底に世界に共通して流るゝ現代精神の在ることを語る事實である。我が日本國は東洋に位置してゐると雖も、日本國民は常にこの世界精神を理解して、世界に適應して變化しつゝ生きて行くことを心掛けねばならない。これを怠るならば、日本精神は固陋に陥り、日本國家は世界に孤立するに至り、それが爲に國家を滅亡に導くことともなるべきである。國家を世界に孤立の地位に立たせるといふことは、單に國交の上でいはるべきでなく、精神的にもいはるべきことである。さうしてこれほど國家の存立發展に恐るべきことはないのである。それであるから、我々は傳統の日本精神を縦の絲と見、世界に共通する現代精神を横の絲と見ると、この二つの絲が唯我々の中に不調和に併存するといふのでは困る。若し又この二つの絲が混

亂して、互に相矛盾し、衝突するやうなことがあれば、彌、困る。否、現にこの二つの精神の不調和、矛盾、衝突は社會の現象として現れてゐる。右と左と相分れて互に相争ひ、相打つ状態に在るのである。ここに於てか、我々はこの縦横二つの絲を以て一つの織物を織出すことを志さねばならない。即ちこの二つの精神の調和統一を目ざして進むことを最も大切な任務としなければならぬ。一面に於ては、日本精神を生かし、これを磨いて益、立派な光を放たしめ、又一方に於ては世界精神にも共鳴を保つやうな、穩健中庸であり、大きく東西を抱擁し得る精神を養成することを目標として進むことを努めねばならぬ。換言すれば、日本的であると共に、世界的である所の精神を養成しなければならぬ。民族的であると共に、國際的である所の精神を養はねばならない。極左の精神が國家を危殆に導くことは誰しもが戒心してゐる所であるが、又それと同様に極右の精神も亦國家に取つて危険であらねばならない。我々は飽くまでも、日本精神と世界精神との調和統一を目標として進まねばならない。

帝國新國文 卷二

甲種實業
三年制用

昭和九年七月三日印
昭和九年七月六日發行

定價金七拾錢

編者 藤村 作

發行者 株式會社 帝國書院
東京市神田區西神田一丁目三

代表者 增田 啓策
印刷者 高橋 郁
東京市京橋區銀座西二ノ三

發行所 株式會社 帝國書院
東京市神田區西神田一丁目三
振替口座東京七〇四

關西販賣所 大阪市東區橫堀四ノ三
三宅莊藏書店

振替口座大阪六九



帝國海國文藝叢書

本科学三学年业组

土井田巧

